R. A. Sayce「1530 年 -1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」の検討（1）

Verification of R. A. Sayce's "Compositorial Practices and the Localization of Printed Books, 1530-1800" (1)

福島　知己

Fukushima Tomomi

本年報既刊でもすでに紹介したとおり、社会科学古典資料センターでは平成 23 年度から平成 25 年度まで、科学研究費補助金の助成を受けて、センターに所蔵されている 1530 年から 1800 年までに刊行された資料をもとにして、古版本の植字・組版上の特徴と印刷地との関係についての調査を行った[1]。以下では、この調査を着想するもとになった R. A. Sayce の論文「1530 年 -1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」[2] と照らし合わせながら、今回の調査の結果を報告する。ただし分量の関係で、数回に分ける。

Sayce の主張をごく簡単に要約すれば、標題紙における出版年の表記の仕方や、ページの並び順を誤らないために印刷・製本業者が利用するいわゆる折記号がどのように記載されているかといったいくつかの特徴について、各国・地域ごとの慣行があり、そういった植字・組版上の特徴と印刷地との間に有意な相関関係を認められるということである。この論文が発表されて以降、思想史や書誌学の研究者を中心に検証が行われてきており、また、C. J. Mitchell や R. A. Leigh によって、Sayce が取り上げなかった本文部分の植字慣行に注目した研究も行われている[3]。

Sayce の研究の主目的は印刷地の推定手法の開発である。現在の本の場合、表紙、標題紙、標題紙裏、奥付などに記載された出版事項を基本的に信頼し、それを拠り所にして目録をとるが、西洋古版本の場合、記載された事項が必ずしも信頼できるとは限らない。匿名書、海賊版、秘密出版物など、政治的・宗教的・私的な理由から真実を秘匿したり、偽りの事項を記したりしている本が数多くあるからである。こうした正しい出版地を匿した本の実際の出版地・印刷

---

[1] 基盤研究 (B)「西洋社会科学古典資料の書誌学的調査に基づく印刷地推定法に関する実証的研究」、課題番号：233330066、研究代表者：山﨑耕一。

[2] R. A. Sayce, "Compositorial Practices and the Localization of Printed Books, 1530-1800", *The Library*, fifth series, 21(1), March 1966. この論文はその後 Oxford Bibliographical Society の Occasional Publication No. 13 として公刊された（Oxford, 1979）。この版にはかなり長い増補と訂正が含まれている。以下で訳出する文章では、特に断りなく、こうした修正を本文中に組み込んでいる。

[3] C. J. Mitchell, "Quotation marks, national compositorial habits and false imprints," *The Library*, 6th series, 5(4), December 1983 ; R. A. Leigh, *Unsolved problems in the bibliography of J.-J. Rousseau*. Edited by J. T. A. Leigh. Cambridge, Cambridge University Press, 1990. 国内では、武者小路信和によって Sayce の研究が紹介されており（「西洋古版本印刷地の見分け方ガイド」、『経済資料研究』34-36、2004-6 年）、それをもとにして印刷地を推定するプログラムが開発されたことがある（戸田慎一「エキスパート・システムによる出版地の鑑定」、『図書館学会年報』32(1)、1986 年）。

地を知ることは、著者についての伝記的研究に役立つばかりか、その本文の信頼性にもかかわるものであるから、思想史・学説史・書誌学・出版史にとって基礎的な意味をもっている。

実際の出版地・印刷地を知るには、著者や出版社の書簡や印刷所の記録といった歴史資料によって状況証拠を得たり、使用されている活字・料紙やオーナメントのような物的証拠を拠り所にして印刷所を特定するといった方法がある。しかし、専門的な知識と経験が必要であり、また、1冊の本について調べるためだけにでも多くの時間がかかる。もっと簡便なのは、世界書誌・各国書誌や、各種の匿名事典を利用したり、偽りの出版地・印刷地を対象にした専門書誌を援用するといった方法である。しかし、すべての本が載っているわけではないし、書誌事項の記述が簡略なため、手元にある実際の本と書誌の記述対象との同定が難しいという欠点がある。

Sayce の方法はこのような意味で印刷地を誰でも比較的容易に見分ける方法として提案されたものだが、ただし実際には、地域ごと、せいぜい都市ごとの植字慣行の相違を問題にしているにすぎない部分も大きい。これは書誌学的な研究ではある程度仕方ないことだが、特殊例の発見に重点を置きすぎるきらいもある。はっきり言えば、推定手法という意味では既知の事柄を再確認しているだけで新たな発見は少ないし、そのうえ確実に言えることは決して多くない。偽版や海賊版においてこれらの植字慣行がどのように保存されているかは必ずしも明確ではないから、どの程度の有効性があるか慎重に検討すべきである。

以上のような問題があるとはいえ、Sayce が行ったような分析が推定の一助となる — 印刷地の特定が可能になるというよりは、偽の印刷地表示に対して疑念をもつきっかけになるといった仕方であれ — ことは確かだし、このような調査をもとにして植字慣行に関する数多くの知見が得られることは言うまでもない。植字慣行の変化から見た Lyon 出版業の盛衰や Plantin 印刷所が当時もっていた影響力など示唆に富む洞察も多い。推定手法の開発という意義を超えて、植字慣行に関する地域的な個性の分析は、出版史や書物史のひとつのトピックとなるだろう。

理論的な問題を抜きにしても、Sayce の調査は対象となった資料の数が十分に多くないうえ、数値化されて提示されていないという難点がある。今回社会科学古典資料センターが行った調査では、Sayce 以降の諸研究も踏まえつつ、包括的な蔵書研究の一環として、できる限り多くの所蔵資料の調査を試みた。この報告では可能な範囲で調査結果の数値を示している。

実際の調査は以下のようにして行われた。センター所蔵資料一冊ずつの植字・組版上の特徴の調査を大学院生・PD の研究協力者を募って行った。研究協力者には、まず今回の調査の目的と内容について説明したうえで、対象資料が貴重書であることを踏まえて、資料取り扱い上の注意点について1時間程度レクチャーを受けてもらった。そのうえで、手分けして調査したのだが、共同で入力する簡便な方法として、マイクロソフト社のデータベースソフトであるアクセスを活用して、右図のような入力フォームを作成し、このフォームに従って入力してもらった。最終年度である平成25年度にそれまでの調査を検証して処理を加え、必要に応じて

再調査を行ってもらった。

ところで、西洋古版本においては、同年に出版された同一タイトルであっても、異版・異刷や「稼働中の印刷機を止めて行った誤植訂正」（いわゆる stop-press-correction）が頻繁に見いだされる。これらには同一版元による印刷の過程で生成されたものが多いが、異なる印刷者によって同一タイトルが印刷される場合もあるし、それが海賊版等の場合もある。本研究の目的は組版上の特徴から印刷地の違いを析出することであるから、異版の識別は非常に重要であった。実際、調査対象であるセンター所蔵資料には同年に出版された同一タイトルの重複（以下では重複図書と呼ぶ）が数多く含まれていた。調査目的に照らせば、これらの重複図書が単に製本の違いや発行（版元が変わったなどの理由で同一の本文に対して異なる標題紙をつける場合等）の違いである場合には重複して調査する必要はないが、印刷者や印刷時期が違う場合には別途調査すべきであった。このため、センターが所蔵している重複図書を可能なかぎり網羅的に調査し、それぞれがどのような意味で重複しているのか検討して、必要に応じて重複データの削除を行った。上記の最終年度の処理は、このような作業も含まれている[4]。

以上のやり方で、センターが所蔵するメンガー文庫、ギールケ文庫、左右田文庫、フランクリン文庫、その他貴重書の一部について、総計 35,258 点の資料の調査を行った（つまりセンターの全蔵書ではない）。このうち、ページ数が 8 ページに満たないもの、1801 年以降に出版されたもの、出版年不明のもの、印刷地も出版地も不明のもの（架空地名を含む）、重複図書（後述）を除くと、印刷地が明示されているものの総数は 2,250 件、出版地が明示されているものの総数は 6,175 件である[5]。印刷地ごとの件数は以下の通りである。

---

[4] 大学図書館で現在広く使われている目録規則である国立情報学研究所が統括する目録所在情報サービス NACSIS-CAT のコーディング・マニュアルでは出版を単位として書誌が作成されるため、このような印刷者に注目した研究とはしばしば切り分けが異なる。一般に、印刷者の違いにとどまらず、異版・異刷・別発行等さまざまなケースが想定されるのであるから、古版本においては同年に同一出版者が刊行した同一タイトルだからといってどれでも同じはずなどと速断してはならず、内容を仔細に検討すべきである。それにもかかわらず、NACSIS-CAT 等の総合目録においては、西洋古版本であっても詳細な書誌記述がしばしば欠落しているため、こうした異版・異刷・別発行等について見過ごされていることが多い。その理由の一端は NACSIS-CAT では洋貴重書の目録作成に関して統一的な規準が示されておらず各大学図書館の裁量に委ねられていることにあり、そして現実的な問題としてほとんどの大学図書館が目録作成にそこまでのリソースを割く余裕をもっていないということにある。センター所蔵資料についてのケーススタディは本年報既刊（34 号、2014 年）の以下の論文で行った。福島知己「1775 年に出版されたネケール『立法と穀物取引について』の諸版について」、同「左右田文庫について少々」。

[5] ただし印刷者と出版者の区別はしばしば便宜的なものである。出版事項、奥付または書籍中のその他の部分に Printed by …、Imprimé par …、Gedruckt … とかいった表現があれば印刷者とみなし、Printed for …、Publié par …、Verlegt … といった表現があれば出版者とみなした。ラテン語では Ex Officina …、Litteris …、Typis … などの表現があれば印刷者、Impensis …、Sumptibus …、Apud … などの表現があれば出版者とみなした。出版地（印刷地）が記されていない場合でも、よく知られた出版者（印刷者）であるなどの理由で自明であるときや、アメリカ合衆国議会図書館の National Union Catalogue pre-1956 imprints（NUC pre-1956）のような典拠ですでに推定されているときには、出版地（印刷地）とみなした。出版事項が明示されていても、特にラテン語などで記されているときには、同定に手間取ることも多い。通常の参考文献類のほか、以下のサイトも参考にした。

・Association of College and Research Libraries / Rare Books and Manuscripts Section (RBMS) による Latin Place Names のリスト
http://net.lib.byu.edu/~catalog/people/rlm/latin/names.htm

・コロンビア大学の Karen Green 氏作成の Johann Georg Theodor Graesse, Orbis Latinus 電子版

フランス	652 件	うち Paris 552 件
ベルギー	52 件	うち Ghent 28 件
スイス	69 件	うち Basle 29 件、Geneve 18 件
イタリア	58 件	うち Venice 20 件
オランダ	107 件	うち Amsterdam 54 件、Leyden 40 件
ドイツおよびオーストリア	340 件	うち Frankfurt 34 件、Wittenberg 23 件、Leipzig 22 件、Wien 21 件、Berlin、Jena 各 18 件
イギリスおよびアイルランド	871 件	うち London 733 件、Dublin 56 件、Ediburgh 29 件
その他	101 件	
計	2,250 件	

また出版地ごとの件数は以下の通りである（出版地または頒布地が複数記しているものは先頭のものを出版地とみなしている）。

フランス	1,314 件	うち Paris 1,113 件、Lyon 51 件、Rouen 38 件、Avignon 18 件
ベルギー	105 件	うち Bruxelles 31 件、Antwerp 29 件、Ghent 19 件
スイス	202 件	うち Geneve 58 件、Basle 55 件、Neuchatel 22 件、Zurich 19 件
イタリア	269 件	うち Venice 125 件、Florence 25 件、Genoa 20 件、Rome 19 件
オランダ	558 件	うち Amsterdam 317 件、The Hague 109 件、Leiden 87 件
ドイツおよびオーストリア	1,712 件	うち Frankfurt 258 件、Leipzig 206 件、Berlin 154 件、Halle 120 件、Wien 115 件、Hamburg 105 件、Göttingen 96 件、Jena 78 件、Nurnberg 52 件、Königsberg 47 件、Strasburg 41 件、Cologne 40 件、Wittenberg 29 件、Hannover 26 件、Tübingen 24 件、Breslau 20 件 [6]
イギリスおよびアイルランド	1,847 件	うち London 1,652 件、Dublin 72 件、Edinburgh 51 件、Oxford 19 件
その他	168 件	Madrid 34 件、Philadelphia 36 件、Copenhagen 26 件、Riga 23 件
計	6,175 件	

以下ではまず Sayce の論文を訳出し、その註という仕方で、センターが行った調査の結果を示すことにする。ただし分量の関係で、今回は全体のほぼ３分の１の内容を紹介するにとどめる。訳文の右肩に註番号を示し、脚註で記したのが Sayce の原註であり、訳文中に丸括弧で括ったアルファベット(a)…で示し、訳文の後に記したのが私の註である。

http://www.columbia.edu/acis/ets/Graesse/contents.html
・Consortium of European Research Libraries による CERL Thesaurus（印刷者も検索できる）
http://thesaurus.cerl.org/cgi-bin/search.pl

[6] Frankfurt と Leipzig は大規模な書籍市の会場であり、そのため出版事項にいずれかの都市が記されていても、そこで印刷されたとは限らない場合がある。Königsberg は現在ロシア領だがドイツ人植民地であったのでこのグループに含めている。同様にポーランドの Breslau も、Sayce に倣ってドイツに含めている。Strasbourg についても調査対象期間中はドイツに含めるのが妥当である。

「1530 年－1800 年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」

R. A. Sayce

小論の目的は応用的なものであり、印刷史についての特別な知識に頼らずに印刷本の出版地・出版時期を定める方法を示唆することである。このような方法の価値は強調するには及ばないだろう。海賊版かどうかを明らかにすることや、諸版の出版順序を確定すること、地下出版や異端的著者の作品の研究、広く思想運動の研究は、どれも本がいつどこで印刷されたかにかかっている（そして本に記された出版事項 (a) を当てにするのは往々にして不適切であったり誤解を招く）。利用可能な方法のうち、活字や装飾模様の研究には一筋縄でいかない熟練の技が必要であるうえ、活字は国際的に取引されていたので、印刷地の特定については捗々しい成果が得られないことも多い[1]。どんな料紙が用いられているかを根拠にするほうが難しくないが、そこから得られる成果はさらに不確実といえる[2](b)。すべてのうちで最も信頼できる証拠は個々の文書であるかもしれないが、文書がいつでも利用できるわけではないし、あるとしても、その文書で言及されている本がいま目の前にある本と実際に同一であるとしてよいかという困難が残っている。総じて植字工の慣行を指針にするのがおそらく一般に最良である（ただし陥穽がないとは決して言えない）。小論で検討される主な特徴的流儀は、折記号、キャッチワード、丁付けとページ付け (c)、および出版事項における刊行年〔の記載方法〕である[3]。以下の見解は、フランス、ベルギー、スイス、イタリア、オランダ、ドイツおよびオーストリア、グレートブリテン (d) およびアイルランド、スペインおよびポルトガル、デンマークおよびスウェーデンで印刷された 2,800 冊超の本の詳細な調査（および他の簡易的観察）に基づいている[4](e)。

---

[1] Jean-Pierre Perret 氏が指摘しているように、F.-B. de Félice of Yverdon は 18 世紀に Lyons、Paris、Brussels、Basle から活字を購入していたのであるから、「用いられている活字を調べただけでは版本がどこで印刷されたかを決めることはできない」（*Les imprimeries d'Yverdon au XVIIe et au XVIIIe siècle*, Lausanne, 1945, p. 103）。

[2] 例えば W. A. Churchill によれば、18 世紀にオランダで出版された本の大半は、フランス製の紙に印刷されている（*Watermarks in paper*, Amsterdam, 1935, p. 7）。また 18 世紀初頭のイギリスの本ではイタリア製の紙が広く見られる（Allan Stevenson in *Catalogue of botanical books in the collection Rachel McMasters Miller Hunt*, vol. ii, Pittsburgh, 1961, *passim*）。

[3] Cf. Giles Barber, 'Catchwords and press figures at home and abroad', *The book collector*, ix (1960), 301-7. Barber 氏のパイオニア的な論文に謹んで謝意を表したい。ただし氏の見解には異論もある。氏が示唆しているよりも問題はもっと複雑である。

[4] 対象となる本の多くを私が検討する機会を作ってくださった友人や図書館員（あるいは両方を兼ねている場合もあるが）のすべてを列挙することはできない。しかしながら 18 世紀後期の本の広範なコレクションの調査を許可してくださった Robert Shackleton 氏と、いくつかの貴重なご指摘をくださった故 L. W. Hanson 氏と D. G. Neill 氏にとりわけ感謝申し上げなくてはいけない。図書館および収集家には以下の略号を用いる。A.: University Library, Amsterdam ; B.M.: British Museum; B.N.: Bibliothèque Nationale, Paris ; Bod.: Bodleian Library ; Cant.; Canterbury Cathedral Library ; C.L.T.S.: 故 C. L. Thijssen-Schoute 博士 ; M.: Bavarian State Library, Munich ; R.A.L.: R. A. Leigh 氏 ; R.A.S.: R. A. Sayce ; R.S.: R. Shackleton 氏 ; T.: University Library, Tübingen ; W.: Worcester College, Oxford ; Wolf. : Herzog-August-Bibliothek, Wolfenbüttel.

特段の固有性があるとか重要な年代上の切れ目をなしているというのでなければ、個別の本には言

疑わしい場合もあるので正確な計算は不可能だが、評価の指針として、印刷国ごとのおおよその数字を以下に示す。括弧内はその国の主要な印刷地である。フランスで印刷された本 932 点（うち Paris で印刷された本 728 点、Lyons で印刷された本 89 点）。ベルギーで印刷された本 90 点（うち Antwerp で印刷された本 53 点）。スイスで印刷された本 143 点（うち Geneva で印刷された本 71 点、Basle で印刷された本 47 点）。イタリアで印刷された本 246 点（うち Venice で印刷された本 90 点）。オランダで印刷された本 667 点（うち Amsterdam で印刷された本 316 点、Leiden で印刷された本 140 点、The Hague で印刷された本 84 点、Rotterdam で印刷された本 43 点）。ドイツで印刷された本 309 点（うち Frankfurt で印刷された本 63 点、Leipzig で印刷された本 50 点）。グレートブリテンおよびアイルランドで印刷された本 377 点（うち London で印刷された本 307 点）。スペインおよびポルトガルで印刷された本 41 点。デンマークおよびスウェーデンで印刷された本 15 点。印刷地を推定する基準としたのは主に出版事項である。ただし印刷者名が別に明記されている場合を除く。年代上の切れ目については改めて説明するまでもないであろう。インキュナブラおよび 16 世紀初頭の本 (f) には独特の問題があり、詳細に研究されてきた。また、1800 年以降は植字慣行に一大変化が起こるので、ここでもさまざまな問題が生じる (g)。16 世紀の本で用いられている標準的な慣行の発祥地を調べる必要があったが、もっと重視したのは、偽版や地下出版物が陸続と出版された 17・18 世紀の慣行を探ることであった。

本研究の制約はこれらのデータから明らかとなろう。調査対象が少なすぎるため、ほんとうにしっかりした結論を導くことはできない。ともかくも小規模ないくつかの印刷の中心地について結論を試みたにせよ、それらは不可避的にほんの数例で代表させているにすぎない（ただしそれらの例がある国ないし地域の一般的パターンを知る手がかりにはなる）。また次のような難点もある。すなわち出版事項を証拠として用いるとすぐに悪循環に陥りかねないということである。標準的な慣行の証拠として挙げた本そのものが当の看破しようとしている偽版ではないとどうして確証できるだろうか。危険性はたしかだが、このような事態は少数であろうし、疑わしそうな本は調査対象から外してある。これに関連して、さらに深刻な難点がある。すなわち、ほんとうに巧妙な海賊版製作者は、模倣しようとしている本ないし印刷者のあらゆる特徴的流儀を、キャッチワードや折記号付けの方式まで含めてまるごと模倣するであろうということである。このことが確かに試みられた例がひとつある。1527 年に印刷されたボッカチオの著作が 1725 年にロンドンで翻刻されたのだが、折記号として小文字のアルファベットとローマ数字を用いること（古風な ii の記し方をすることも）といい、丁付けをしていることといい、キャッチワードが記されていないことといい、本物とそっくりであった[5]。ただ言えるのは、あらゆる海賊版製作者や地下印刷者がこれと同じほど注意深かったというわけでは決してないということである。また出版事項に記載された地名がそのまま印刷地であるわけではないということも明らかである。ただしそのような例も多くはないので、本考察には支障なさそうである。

これらの留保と制約について説明し尽くしたとしても、調査結果には注意深い解釈がなお必要である。ある土地ないし地域で見つかったにすぎない特徴的流儀（そんな特徴的流儀は多く

及しない。

[5] そうはいっても、これはいくつかの重要な点でほんものとは異なっていた。1729 年に Venice で作られた翻刻はほとんどファクシミリの域に達しており、さらに明白な例となっている。他のいくつかの可能な例については、Barber, ‘Catchwords’ を参照。

ない）とその地域にだけあてはまる独特な特徴的流儀とを区別する必要がある。多くの場合、特徴的流儀を組み合わせて結論が導けることになる。

Ⅰ．　折記号

たとえばMcKerrowが述べているような折記号の一般的パターンについての知識は前提とする[6](h)。すなわち、折記号とは、大文字と、最初の紙葉以外はそれに続くローマ数字ないしアラビア数字とから構成される。折記号に用いられるアルファベットはAからZへ進んでいくが、J、U、Wは用いられない。必要に応じて2巡目のアルファベットがAaから始まり、3巡目にはAaa、以下も同様に続く。以下では通常はこのパターンの最初だけを記録することにする。

1．前付部分の折記号

地域ごとの変化が最も強く出るのがおそらく前付部分(i)で用いられる記号であり、従って特別な注目に値する。前付部分の折記号に何を用いるかは本文の折記号に何を用いるかによって異なる場合があり、理屈からすればそれについては後述すべきとなる。しかし読者の便としては本の順序に従って説明するほうがよい。記号の組み合わせに意味がある場合もあるが、分析目的からすれば分けて論じる必要がある。

(i) アステリスク ★

アステリスクは前付部分に対して最もひろく用いられる記号であり、どの時代にもどの国でも見られる(k)。とはいえ特にオランダで印刷された本の特徴的流儀といえる。実際、これが標準的なオランダのパターンの通常の（ただしかならずそうだというわけではない）構成要素と考えてよい。調査した中の最も早い例はLeiden（1575年）の本に見られ[7]、最も遅い例はLeidenとAmsterdam（1799年）に見られた[8]。この間ほぼ一定割合で分布している。Amsterdamで印刷された本で用いられている例が特に多く（全体で137点）、最も早い例で1582年、最も遅い例で（1799年の例を除くと）1787年であった。他の地名と刊行年の幅は以下の通りである。The Hague（1599年－1764年）。Rotterdam（1647年－1743年）。Utrecht（1648年－1741年）。Franeker（1594年－1724年）。Harlingen（1674年－1742年）。Leeuwarden（1672年－1717年）。Dordrecht（1657年－1755年）。Groningen（1691年－1754年）。Delft（1683年－1722年）。散発的な例はGouda（1613年）、Haarlem（1652年）、Kampen（1690年）、Maastricht（1731年）、Hoorn（1747年）、Zwolle（1763年）に見つかる(l)。単にアステリスクが用いられているという以上に特徴的なのは、最大で12個におよぶほど連続で用いられるということである。他の地域では、通常なら小文字アルファベットを使うことによってアステリスクが連続するのを避けている[9]。オランダの印刷者はアステリスクが長々しく連なるのを中

---

[6] *An introduction to bibliography*, Oxford, 1927, reprinted 1949, pp. 25-26, 73-8, 188-94.

[7] I. Duza, *Nova poemata*, in nova Amdemja nostra Lugdunensi, I. Hamrenus, 1575 (A.: 969.D.8).

[8] D. Wyttenbachjus, *Vita Davidis Ruhnkenii*, Lugduni Batavorum et Amstelodami, A. at J. Honkoop at P. den Hengst, 1799 (W.: GG.6.15).

[9] あまり見るやり方ではないがわかりやすい例として、Calmet, *Commentaire litteral*, vol. i, Paris, Emery *et al.*, 1724 (W.: C.2.2) では、前付部分の折記号がまずイタリック体の*A*から始まり、続いて★、★★、★3、★4となり、以下同様で最後は★20となっている。こうすればアステリスクが長く連続する

断するため、それらを3つあるいはそれ以上からなるいくつかのグループに分けている。このやり方はおそらくオランダに限られる[10]。とはいうものの、こんな長々とした前付部分があるのはふつう硬い学術書だけなので、海賊出版ないし地下出版であることは比較的少ない。

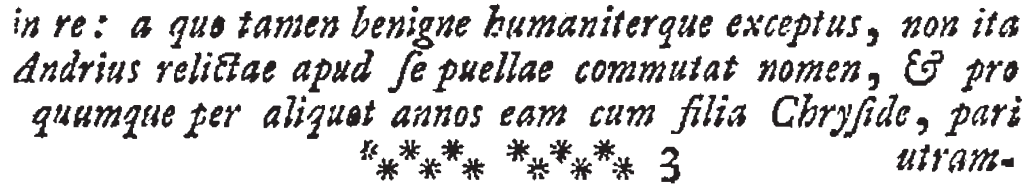

in re: a quo tamen benigne humaniterque exceptus, non ita Andrius relictae apud se puellae commutat nomen, & pro quumque per aliquot annos eam cum filia Chryside, pari
**** **** 3 utram-

FIG. 1. Terence, Comoediae sex, Hagae-Comitum, apud Petrum Gosse, 1726

オランダ以外でアステリスクが最も広く使われるのはアントワープで（ここがオランダではないとすればと話だが (m)）、1534 年[11] から 1668 年[12] まで見られる。観察された中で Plantin または Moretus で 1571 年から 1638 年までに印刷され前付部分に折記号がある 17 点のうち 15 点にアステリスクが使用されていた。このことから（印刷者の特定に役立つという可能性に加え）、17 世紀における標準的なオランダの慣行が Plantin の影響を受けたものかもしれないという推測が成り立つ。1588 年から 1618 年までに Leiden で出版され Plantin または Raphelengius の名前が出版事項に記されたいくつかの本や初期の Elzevier の本にもアステリスクが使われているということがこの推測の傍証となる。

ベルギーの他の都市は簡単に済ませてよい。Brussels と Liège で 17 世紀後期（1660 年－1705 年）に出版された本に数例、さらに遅い時期に 1 例（Brussels 1788 年）がある。Luxemburg で印刷された 1 例（1702 年）が見つかっている。

フランスに目を転じれば、アステリスクは明白に例外的である。Paris で印刷された本では、たとえ用いられているとしても、もっと特徴的な記号と組み合わされるのが一般的である。1569 年に出版された本で 3 つのアステリスクをグループにした例が見つかっている。単独では 16 世紀および 17 世紀前半に時々見つかっている。最も早い例は 1532 年[13]、最も遅い例は 1655 年[14] である。18 世紀にも 1735 年[15] から 1774 年[16] まで数例で使われている。他方、とりわけ 17 世紀後期に、出版事項を偽って Paris と記した本でアステリスクが非常にひろく用いられている。それに比べると Lyons（17 世紀後期まで Paris と異なるパターンをもっていた）のほうがよく用いており、（他と組み合わされている場合以外でも）1553 年から 1653 年までいくつかの例が見つかる。3 つのアステリスクをグループにした例は Saumur（1662 年、1666 年、1670 年）で見つかっているが、そうでなければフランスの地方都市ではばらばらにいくつかの例が見つかるだけである。すなわち Caen（1562 年）、Bordeaux（1582 年）、Rouen（1602

のは避けられる (n)。

[10] FIG. 1 を参照。

[11] *La Saincte Bible*, Anuers, M. Lempereur, 1534 (Cant.: N.5.3) ; *Biblia*, Antverpiae, M. Cæsar, 1534 (W.: C.8.5).

[12] Tacitus, *Opera*, Antverpiae, B. Moretus, 1669 (W.: M.1.5).

[13] *Biblia*, Parisiis, R. Stephanus, 1532 (Bod.: P.7.5 Th.).

[14] Lucian, *Timon*, Parisiis, ex Officina Cramosiana, 1655 (W.: FF.8.15).

[15] G.-C. le Gendre, *Traité de l'opinion*, Paris, Briasson, 1735,vol. i (W.: II.n.2).

[16] *Mémoires de littérature*, vol. XXXVII, Paris, Imprimerie Royale, 1774 (W.: P.7.2).

年、1616 年)、Orleans（1604 年)、Douai（1605 年)、Cambrai（1613 年)、Avignon（1623 年)、Toulouse（1643 年)、Arles（1680 年)、Saint-Omer（1723 年）である (o)。

スイスで印刷された本では、アステリスクは Neuchâtel で Olivetan によって 1535 年に印刷された聖書[17] に使用されており、1744 年と 1783 年にも用いられている。Geneva でも 16・17 世紀にかなり広く用いられており、使用例は 1540 年から 1672 年まで及び（Paris のパターンとはわずかに時期のずれがある)、18 世紀の本も 2 例が見つかっている（1738 年、1753 年)。他方 Basle で用いられている例は極端に少ない。私が見つけたのは 1587 年に印刷されたもの 1 例にすぎない[18]。おなじように Zurich で印刷された本も 1 例(1562 年)しか見つけられなかったが、Zurich で印刷された本の調査点数(8 点)が少なすぎるので統計的に有意とはいえない (p)。

イタリアで印刷された本で前付部分の折記号にアステリスクが用いられている例は若干少なく、主に 16 世紀および 18 世紀後期に集中している。たとえば Rome（1551 年－93 年、1648 年、1696 年、1772 年－83 年)、Venice（1554 年－91 年、1698 年、1708 年－73 年)、Padua（1587 年－1722 年、17 世紀の刊本 4 点を含み均等に分布している)、Florence(1552 年－94 年、1684 年)のものが見つかっている。もう 1 点の初期の例が Ferrara (1586 年) で印刷されたものである。他に見つかった例はすべて 18 世紀に印刷されている。Palermo（1723 年)、Verona（1735 年、1737 年)、Lucca（1749 年)、Naples（1765 年、1796 年)、Turin（1772 年)、Vicenza（1791 年)。不思議なことに、Naples や Vicenza で印刷された本でこれ以前に前付部分の折記号にアステリスクが用いられている例はなく、他のイタリアの 22 の都市（Bologna を含む）では用いられている例がひとつも見つからなかった (q)。さらにスペインとポルトガルの事例も少数だが示しておく。ただし少数なのであまり有用性はない。Coimbra（1564 年)、Madrid（1583 年、1638 年、1667 年)、Saragossa（1649 年)、Seville（1687 年)、Lisbon（1720 年)、Salamanca（1737 年)、Barcelona（1796 年）(r)。

ドイツで印刷された本のうちで最も古い例は Frankfurt（1543 年）[19] のものである。16 世紀後期から 17 世紀前期にかけての印刷本に相当数が見つかっている。Oberursel（1558 年)、Dillingen（1575 年)、Tübingen（1577 年)、Frankfurt（1581 年－1627 年)、Cologne（1589 年－1619 年)、Ingolstadt（1602 年)、Hanau（1609 年－13 年)、Linz（1609 年)、Augsburg（1614 年)、Heidelberg（1616 年)。17 世紀後期から 18 世紀にかけての印刷本では、Danzig（1651 年)、Duisburg（1658 年)、Frankfurt（1681 年－1746 年)、Leipzig（1691 年－1791 年)、Cologne（1683 年)、Dresden（1679 年、1737 年)、Wittenherg（1701 年)、Berlin（1749 年)、Vienna（1791 年）のものが見つかっている。この時期には Strasbourg の印刷本にはドイツの特徴的流儀が残っているが、個別に論じるべきかもしれない。使用例は 1595 年から 1710 年にかけて均等に分布している。結論として、アステリスクの使用はフランスと比較すると広く用いられているとはいえ、ドイツの折記号の特徴的流儀とまでは言えない。さらに付け加えれば、スウェーデンで印刷された本でも Stockholm（1649 年、1652 年)、Uppsala（1654 年）など数例が見つかっている[20](s)。

---

[17] Bod.: Douce B subt. 4.

[18] La Nouë, *Discours politiques*, Basle, F. Forest, 1587 (R.A.S.). しかしこの本は Basle で印刷されたのだろうか。Brunet は同年に Geneva で刊行された版を挙げており、そこにも出版者は Forest と記されている。P. Chaix, A. Dufour, and G. Mceckli, 'Les livres imprimés à Genève de 1550 à 1600', *Genava*, vii (1959), 331 も参照。

[19] M. Kling, *In quantor … enarrationes*, Francoforti, C. Eganolp, 1543 (W.: GG.3.5).

[20] 後掲次頁の註 22 を参照。

イングランドで印刷された本ではフランスで印刷された本とおなじく、少なくとも 16 世紀以降、アステリスクはあまり用いられない。16 世紀でいえば、London で印刷されたものが 9 例（1566 年－90 年）見つかっている。それ以降は 5 点を数えるのみである（組み合わせて使われている場合を除く）（1672 年、1687 年、1710 年、1733 年、1760 年）。このうち最後のものはおそらく London で印刷されていない[21]。Oxford で印刷された本では 4 例（1585 年、1612 年、1637 年、1658 年）があり、Cambridge で印刷された本では 1 例（1699 年）がある。Edinburgh で印刷された 1 例（1582 年）を除けば、スコットランドの例は見つからなかった[22](t)。

まだ疑う余地は往々あるが、アステリスクが用いられるのはオランダまたは Antwerp で印刷された本と推測してよさそうである。とりわけ他の記号と組み合わされることなく体系的に、いくつも連続して、左右対称のグループでアステリスクが用いられているときはそうであるといえる。スイスで印刷された本でアステリスクが用いられるのは Basle よりも Geneva であると推測される (u)。

（ii）短剣符　†

このやり方はアステリスクに比べるとまったく一般的ではないが、ひろく用いられた方法である (w)。とりわけ 16 世紀後期および 17 世紀のイタリアに独特な特徴的流儀であるが、それほど頻繁ではないし、もっと後年になるとオランダでも用いられている。最も古いイタリアの例は Bologna（1551 年）で印刷された本に見つかる[23]。Venice で用いられた例は 1566 年から 1637 年まで見つかり、Rome で用いられた例は 1624 年から 1704 年まで見つかっている。他の例は Parma（1552 年）、Casalmaggiore（1581 年）、Padua（1587 年）、Ferrara（1590 年）、Naples（1590 年、1636 年）、Florence（1590 年、1643 年）、Pesaro（1600 年）、Verona（1601 年）、Milan（1609 年）、Genoa（1615 年）、Pavia（1627 年）、Perugia（1678 年）、Modena（1711 年）、Lucca（1744 年）(x)。オランダで印刷された本では 17 世紀前期に Leiden で印刷された本（1609 年－24 年）に 3 例が見つかっている。さらに世紀中葉以降も Amsterdam（1649 年－1742）、Breda（1653 年）、Gouda（1655 年）、Rotterdam（1699 年）、Leiden（1779 年）、Harlingen（1742 年）、Leeuwarden（1747 年）で使われている (y)。アステリスクの場合とおなじように、短剣符が連続していくつも使われたり、左右対称のグループで使われたりすることがある (z)。

イタリアとオランダ以外で印刷された本で見つかった例は多くない。Paris で印刷された本では、短剣符の場合も、他の記号と組み合わせて使われるほうが多い。単独で用いられている例が 16 世紀（1566 年－77 年）に時折見受けられるが、17 世紀になると 2 例にすぎず（1602 年、1658 年）、それ以降はまったく見つかっていない。Lyons で印刷された本のパターンも似たようなものだが、1599 年から 1659 年までの例（他の記号と組み合わされていない例）が見つかっている。組み合わせられているうちで風変わりな例としては、†、⋆、⋆⋆、⋆†⋆、⋆⋆†⋆とい

[21] A. Radicati, *Recueil de pieces curieuses*, Londres, S. Van den Bergh, 1760 (R.S.).

[22] Buchanan, *Rerum Scaticarum historia*, Edimburgi, A. Arbuthnetus, 1582. (*STC* 3991). ただしこれは丸括弧に 3 つのアステリスクを入れた特殊事例である(⋆⋆⋆)。おなじ特徴的流儀をもつやり方は Hanau（1610 年）、Augsburg（1614 年）、Uppsala（1654 年）、London（1670 年、ただし角括弧を使用）の印刷本にも見つかっている。

[23] I. Ringhicri, Cento giuochi liberali, Bologna, A. Giaccarelli, 1551 (W.: P.4.15).

順序で用いられた例がある[24]。フランスの他の都市で短剣符を使った例はBordeaux（1574年）とTroyes（1641年）のもののみ見つかっている(aa)。

ベルギーのものは3例が見つかったのみで、うち2例はAntwerpで印刷された本（1561年、1578年、後者はPlantinの本）、1例はLouvainで印刷された本（1594年）であった(bb)。スイスで印刷された本ではBasleのもの2点（1566年、1601年）、Genevaのもの4点（1626年－1718年）、Lausanneのもの1点（1748年）が見つかった(cc)。ドイツで印刷された本では例が少なく、16世紀後期から17世紀前期に集中している。Cologne（1591年－1615年）、Frankfurt（1607年－37年）、Mainz（1609年）(dd)。イングランドで印刷された本ではOxfordのものに1例（1668年）があり、Londonで印刷された本（すべて他の記号と組み合わされている）に3例（1571年、1722年、1733年）が見つかっている。このうち最後のものは短剣符が上下逆に使われている↓[25]。Londonで1574年に印刷された本でロレーヌ十字✝が使われた1例が見つかっている(ee)。スペインとポルトガルで印刷された本で短剣符が使われたのは2例のみであり（Seville 1632年、Lisbon 1685年）、北欧の例も1例であった（Stockholm 1713年）。ただし調査対象が少ないのでこの結果は確定的ではない(ff)。

前付部分の折記号に短剣符が用いられるのは、イタリアで印刷された本か、17世紀後期以降ではオランダで印刷された本と推測される。1660年以降にフランスで印刷されていると名乗っている本の前付部分の折記号で短剣符が他の記号を伴わずに用いられている場合は、印刷地が疑わしいとみなしてよいかもしれない(gg)。

（iii）段落標 ¶ ¶ ¶

段落標には（細かな違いを無視すれば）上部がすべて黒いもの、白抜きの部分があるもの、二本足のものという3つの種類があり、これらを以下ではタイプ1、タイプ2、タイプ3と呼ぶことにする。前付部分の折記号に段落標が用いられるのは主に16世紀後期から17世紀前期であり、一番用いられるのはGeneva、それに続いてFrankfurtである。スペインではそれ以降も非常に長いあいだ用いられた。他ではあまり用いられない。

Genevaで印刷された本で前付部分の折記号に段落標が最初に使用されている例はEstienneによって1560年に印刷されたフランス語の聖書であり[26]、最後の使用例は1680年に印刷された本である。ほとんどはタイプ1である。スイスで他に使われている例はなく、とりわけBasleで印刷された本が1冊もないのが目につく。Frankfurtで印刷された本では1593年から1659年まで用いられており、3種類すべての例がある。ドイツの他の印刷地の例はUlm（1623年）、Leipzig（1655年）、Marburg（1717年）である。最後のものは大都市に遅い時期までこの慣行が残っていた例であるが、もっとどこでも見られる記号と組み合わせて使われている。

最も古いスペインの例がMadrid（1591年）に見つかる[27]。それ以降ではCuenca（1596年）、Toledo（1599年）の例があり、Lisbonに2例（ポルトガル語の本）（1618年、1685年）、Sevilleに2例（1648年、1687年）見つかる。Madridでは他にも17世紀（1609年、1619年、1643年、1649年、1669年）にも使われている例があり、18世紀にも3例（1753、1759年、

---

[24] Montaigne, *Livre des essais*, Lyon, Pour G. La Grange, 1593 (B.M.: 8408.b.5).

[25] Thuanus, *Historiarum sui temporis* ..., Londini, S. Buckley, 1733, vol. i (W.: N.1.13).

[26] *La Bible*, R. Estienne, 1560 (B.N.: A. 317). 出版地は記載されていないが、Genevaで印刷されたと見て間違いなさそうである（E. Armstrong, *Robert Estienne, royal printer*, Cambridge, 1954, p. 228）。

[27] Vicente Espinel, *Diversas rimas*, Madrid, L. Sanchez, 1591 (Wolf.: Ll96).

1778 年）見つかっている。タイプ 1 が使われる例が一番多いが、タイプ 3 の例もいくつかあり、最後の 3 例はいずれもタイプ 3 である。興味深いことに Lima で 1731 年に印刷された本でも段落標が用いられている[28]。

フランスで印刷された本では Paris で印刷された本には 3 例（1597 年、1609 年、1679 年）を数えるのみである。すべてタイプ 1 であり、3 例のうち後の 2 例は他の記号と組み合わされて使われている。Lyon で印刷された本では 1594 年から 1623 年までに印刷された 4 例がある（対比すればかなりの量と言える）。フランスの他の都市で印刷された本で用いられた例は Tournon（1605 年）、Maillé（1616 年）、Saumur（1674 年）がある。オランダで印刷された本では Leiden の本のみに見つかった（1609 年、1618 年、1620 年）。Amsterdam で印刷された本に 1 冊も見つからないのが注目される。イングランドで印刷された本では 16 世紀および 17 世紀前期には前付部分の折記号に段落標を用いるのが一般的で、London で 1571 年から 1618 年までに印刷された 11 点と Oxford で印刷された 3 点（1587 年、1590 年、1675 年）、Cambridge で印刷された 2 点（1610 年、1655 年）。Dublin で印刷された 1 点（1633 年）、Edinburgh で印刷された 1 点（1615 年）が見つかっている。イタリアでもベルギーでも一例も見つからなかったが、そのことはもちろん意義深い。

従って、段落標を用いるのはジュネーヴで印刷された本あるいはもしかすればスペインで印刷された本であると推測されるであろう。イタリア、ベルギー、オランダ（ただし 1620 年以降）で印刷された本ではなさそうであり、フランスで印刷された本の特徴的流儀とも言いがたい (hh)。

（iv）節標 § §

これが使われることはかなり珍しいので、所見を簡単にまとめておく。16 世紀の事例は 1 例（Strasbourg 1570 年）のみ観察されたが、2 つのピリオドに囲まれている.§.。イタリアで印刷された本では Naples（1608 年）、Padua（1654 年）、Venice（1671 年）、Florence（1724 年）、Sassari（1774 年）の例が、スペインで印刷された本では Valencia（1628 年）、Madrid（1638 年、1663 年）、Huesca（1646 年）、Seville（1648 年）、Barcelona（1738 年）の例が、スイスで印刷された本では Geneva（1602 年、1680 年）、Lausanne（1760 年）の例がある。フランスで印刷された本では 1 例（Paris 1730 年）で、大文字アルファベットと組み合わせて使われている。イングランドの例も 1 例である（Oxford 1672 年）。オランダとベルギーの例は見つからなかった。

なにかしら本格的な結論を導くにしては例が少なすぎるが、以下の点を指摘してもよいかもしれない。すなわちイタリアとスペインには節標を用いようとする嗜好が見受けられる。そして、さらに重要なことだが、オランダで印刷された本に節標が用いられることはまずないということである (ii)。

（v）ギリシア十字またはマルタ十字 ✠ ✠

これらの基本的パターンにはさまざまな変種がある。最も古い例は Barcelona で 1543 年に印刷された本に見つかる[29]。Louvain で印刷された本 1 点（1550 年）、Antwerp で印刷された本

[28] P. de Peralta, *Lima fundada*, pt. i, Lima, F. Sobrina y Bados, 1732 (M.: P.O. hisp. 56cs).

[29] Boscan, *Las obras*, Barcelona, G. Amoros, 1543 (M.: P.O. hisp. 7). ざっと見たところ、後年のスペイ

1 点（1592 年）、Lisbon で印刷された本 1 点（1685 年）が他の記号と組み合わせられて使用された例である。Basle で印刷された本 3 点（1555 年、1566 年、1567 年）が初期の事例といえる[30]。これらの事例では十字のかたちがやや風変わりであること（1567 年の事例では二重の十字になっている）[31]、そして最後の 2 つで十字が他の記号と組み合わされていることを書き留めておく。

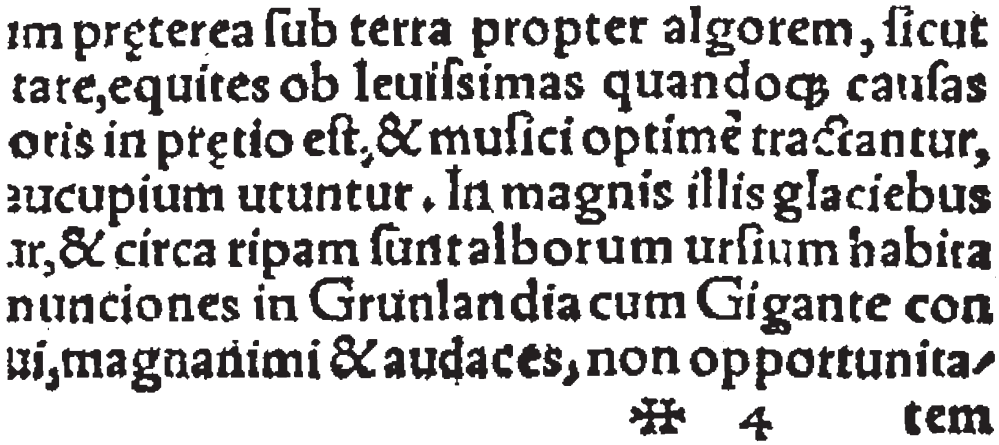

im pręterea ſub terra propter algorem, ſicut
tate, equites ob leuiſsimas quandoq; cauſas
oris in pretio eſt, & muſici optimè tractantur,
aucupium utuntur. In magnis illis glaciebus
ir, & circa ripam ſunt alborum urſium habita
nunciones in Grunlandia cum Gigante con
ui, magnanimi & audaces, non oppportunita-
✠ 4 tem

FIG. 2. Olaus Magnus, Historia, Basileæ, ex officina Henric. Petrina, 1567

さらに後年では Dordrecht（1728 年）の印刷本で意外なやり方がされている[32]。つまり通常のアステリスクと混ぜて使われているのである。

しかし一般には、この特徴的流儀はほぼイタリアでだけ見られるものである。とりわけ Rome で印刷された本に特徴的である。初期には Venice でも見られる（1555 年、降って 1734 年）。Rome では 1606 年から 1672 年までいくつも例が見られる。Florence の例も 1612 年から 1695 年まで見られる。他に散発的な例として、Milan（1590 年）、Verona（1601 年）、Padua（1615 年、1647 年）、Bologna（1627 年）、Perugia（1651 年）、Modem（1706 年）、Lucca（1744 年）がある。従って、いずれにしても 1600 年以降にギリシア十字やマルタ十字を前付部分の折記号に単独で用いていれば、イタリアで印刷された本であるという強い推測が成り立つ (kk)。

（vi）丸括弧と角括弧

（a）逆順の丸括弧) ( ):( )o( )?(

これはドイツに特徴的な前付部分の折記号のやり方である（前 2 者がはるかによく用いられる。最初の 2 つまたは 3 つは連続した折丁で順番に用いられることがある）(ll)。最も古い例は Oberursel で 1558 年に印刷された本に見つかっている[33]。Basle で印刷された本では) (また

ンの例 2 点が見つかった（Salamanca 1564 年、Majorca 1633 年では他の記号と組み合わされている）。

[30] *La Bible*, Bale, I. Heruage, 1555 (Bod.: B.16.5 Th.); Guicciardini, *Historiarum sui temporis …*, Basileae, P. Perna, 1566 (W.: N.3.5); Olaus Magnus, *Historia*, Basileæ, H. Petrina, 1567 (W.: N.8.9).

[31] FIG. 2 を参照。

[32] Fontainelle [sic], *Reden-Voeringe over verscheidene Waerelden*, Dordrecht, H. Walpot, 1728 (C.L.T.S.).

[33] E. Haberkorn, *Sententiae ex doctoribus*, Ursellis, N. Henricus, 1558 (T. : Gf 67).

は):(が使用されている例が 1569 年から 1584 年まで見つかっている。1569 年刊の本では) (と ( ) が用いられている[34]。)o(が用いられている 17 世紀の例は 1625 年から 1679 年まで見つかっている。後年のドイツの例としては Dillingen（1574 年）、Leipzig（1585 年、1593 年）、Hamburg（1592 年）があり、それ以降になるとこの特徴的流儀の使用例が急激に増える。Strasbourg（1595 年－1775 年）、Tübingen（1596 年－1719 年）、Frankfurt（1597 年－1728 年）、Lauingen（1600 年）、Augsburg（1601 年－1723 年）、Hanau（1602 年－19 年）、Mainz（1605 年）、Cologne（1606 年）、Prague（1606 年）、Rostock（1607 年）、Herborn（1613 年）、Munich（1617 年、1763 年）、Oberursel（1618 年）、Leipzig（1629 年－1787 年）、Pressburg（1644.）、Jena（1659 年、1680 年）、Altdorf（1660 年）、Heidelberg（1682 年）、Nuremberg（1683 年、1696 年）、Hamburg（1687 年－1719 年）、Halle（1699 年－1741 年）、Marburg（1717 年）、Wittenberg（1719 年）、Bremen（1728 年）、Danzig（1729 年）、Berlin（1745 年－55 年）、Vienna（1754 年）、Altenburg（1766 年）、Chur and Lindau（1772 年）、Stuttgart（1782 年）、Breslau（1789 年）、Gera（1798 年）。250 年余におよぶ広がりをもつわけで、これはある特徴的流儀が特定地域で継続して用いられるということの絶好例であるといえる。ただし調査対象中では 1733 年（Leipzig）以降):(が使われた例は見当たらず、また)o(は 1719 年（Hamburg）以降使用例がなかったことを指摘しておく。

ドイツ（および Basle）以外でこの特徴的流儀が見られることはめったにない。以下の諸例が観察された。Leiden（1619 年、1697 年）、Amsterdam（1660 年）、Louvain（1648 年）、Uppsala（1697 年）、Stockholm（1726 年、1786 年）、Copenhagen（1746 年）、St. Petersburg（1771 年）、London（1636 年、大文字の A と組み合わせて使われている）[35]。これらのうち Copenhagen、Stockholm（1786 年）、St. Petersburg のものを除いてすべて単純な) (の形式が使われている。結論として、逆順の丸括弧を単独で用いるやり方や、とりわけ丸括弧のあいだに記号を挟むやり方が使われていれば、ドイツ、ドイツ語圏スイス、北欧のいずれかで印刷されたことを強く示唆しているといえる (mm)。

（b）丸括弧で他の記号を囲むやり方

概して重要なのは丸括弧よりも囲まれている記号であるが、なんらかの結論が導けそうである。第 1 に、ドイツで印刷された本に特徴的な記号、とりわけコロンが、通常の順序の丸括弧に入れられて使われることがある (:)。このやり方は Basle（1578 年）、Frankfurt（1579 年－1638 年）、Cologne（1616 年、1620 年）で印刷された本に見つかっている。他の印刷地では見つかっていない。疑問符を挟むやり方 (?) は Cologne で印刷された本（1628 年）に見られるが、Leiden でも (!) と共に用いられた例（1636 年）がある。Deventer（1652 年）、Stockholm（1656 年）の例も見つかっている。

アステリスクを囲むやり方 (★) は Leiden（1636 年）、Amsterdam（1648 年）、Rotterdam（1650 年、1655 年、1657 年）、Dordrecht（1657 年）で印刷された本に見つかっている。ドイツで印刷された本では Frankfurt（1581 年）、Hanau（1604 年）、Cologne（1609 年）、Hamburg（1670

---

[34] Xenophon, *Omnia, quæ existant, opera*, Basileæ, T. Guarinus, 1569 (W. : M.2.3). ふつうの丸括弧 ( ) がアステリスクと共に用いられている例が Aretaeus, *De causis … morborum*, Lugduni Batavorum, J. vander Aa, 1735 (W. : N.3.6) に見られる。

[35] Oxford で印刷された本で):(が用いられている例（1662 年）が K. Povey, 'Working to rule 1600-1800', *The Library*, V, xx (1965), 30 で言及されている。

年)、Dresden（1679 年)、Strasbourg（1710 年）のものが見つかっている。Madrid（1638 年）と Stockholm（1652 年）の例もある。短剣符が使われた例 (†) が Amsterdam（1655 年）と Stockholm（1713 年）に 1 例ある (nn)。

小文字アルファベットを囲むやり方 (a) (b) (c) は The Hague（1681 年)、Amsterdam（1684 年、1700 年、1734 年)、Utrecht（1696 年）で見いだされた。ドイツの例は Augsburg の 1 例（1723 年）であり、Geneva では 2 例（1626 年、1716 年）が見られた。しかしこの慣行が最も盛んであったのはイングランド[36]であり、小文字アルファベットが丸括弧に入れられて使用されている例が London で 1650 年から 1756 年までに印刷された本と Oxford で 1725 年に印刷された本に見られる。特殊なやり方としては (a (b (c という仕方が London で 1642 年に印刷された本[37]に見られ、アステリスクを囲むやり方 (★) が 1635 年の刊本に見つかっている。London の印刷本でさらに特徴的なのは、小文字アルファベットを角括弧で囲むやり方 [a] [b] [c] で、1682 年から 1762 年の印刷本に使用例が見られる。イングランド以外では、この特徴的流儀が用いられている例は Rotterdam（1697 年、1720 年）のみにすぎない (oo)。

以上から、丸括弧でコロンを囲むやり方がされていればほぼ間違いなくドイツまたは Basle で印刷された本であり、アステリスクを囲むやり方がされていればおそらくオランダないしドイツで印刷された本である。小文字アルファベットを丸括弧で囲むやり方がされていればおそらくイングランドで印刷された本であり、角括弧で囲んでいればイングランドで印刷された本である蓋然性がさらに高い。ここでは否定的証拠がさらに重要である。フランス、ベルギー、イタリアで印刷された本では丸括弧を使って前付部分の折記号を表すやり方をとる例は全然見られなかった。もし前付部分の折記号に丸括弧が使われていれば、フランスで印刷された本ではないという論拠になるであろう (pp)。

（vii）小文字のａｂｃ

前付部分の折記号にアステリスクに次いで最もよく用いられるのが小文字アルファベットであり、どの国でも、通常その地域で用いられる慣行がいかなるものであったとしても、いくつかの本ではこのやり方が採用されている。18 世紀になって次第に広がりを見せるため区別することがさらに難しい。広範に普及しているので印刷地判定にはあまり役立たないが、印刷時期を考えるときには、とりわけ 18 世紀のフランスの本の事例についてはある程度有効かもしれない。ローマン体かイタリック体かはここでは問わない。折記号が書かれた上にある文章がイタリック体になっていれば折記号もイタリック体にするというのがほぼどこにでも見られる慣行であるが、そのことには明らかになんら特別な意義を認められない。そうではなくて文章はローマン体なのに折記号がイタリック体であれば、調査結果がなにがしかの興味を惹くものとなるであろう。

調査対象中でこの特徴的流儀が示されている最も早い本は、Antwerp で 1530 年に印刷されたものである[38]。Basle で 1533 年から 1560 年に印刷された本と Zurich で 1558 年に印刷された本にもこの特徴的流儀が現れている。Paris の例 1 点は 1540 年に印刷されたものであり、

---

[36] ただし Edinburgh で 1686 年に印刷された本（Wing C421）の使用例として以下を参照。James L. Harner, *Ex libris F. S. Ferguson. A checklist of the F. S. Ferguson collection of Scottish imprintes and Scotica at the University of Illinois*, Urbana, Ill., 1972, p. 7.

[37] Erasmus, Epistolarum ..., Londini, M. Flesher & R. Young, 1642 (Wing E3201).

[38] *La Saincte Bible*, Anuers, M. Lempereur, 1530 (Bod.: Bib. Fr. 1530. c. 1).

Venice の例 1 点は 1561 年に印刷されたものである。Paris で印刷された例は他にも 1540 年、1542 年、1548 年、1557 年、1569 年、1572 年（2 点）、1574 年のものが見つかっている。前付部分が長くなってしまったときに、他の記号を使い切った後になって使用される場合を除けば、Paris で 1710 年頃までに印刷された本で小文字アルファベットが前付部分の折記号として使用されることは少ない（1604 年、1606 年、1643 年、1646 年、1652 年、1679 年（2 点）、1683 年、1686 年、1692 年、1693 年、1694 年の事例がある）。Lyons で印刷された本では 1558 年、1561 年、1676 年に使用されている。地方都市で印刷された本では他に La Rochelle（1581 年）、Rheims（1582 年）、Bordeaux（1594 年、1595 年）、Aix（1674 年）、Caen（1683 年）の例が見つかっている。ただし 1710 年頃から Paris で印刷された本でこのやり方がしだいに普及してきており、1730 年頃以降は前付部分に折記号を記す際の一番よくあるやり方になっている。他の記号と組み合わせて小文字アルファベットを用いている最も遅い例は 1732 年に印刷されたもので、それ以降使われるときは単独で用いられている（そしてイタリック体になっていることが多い）。地方都市の本もおなじパターンに従う傾向がある。というのは、おなじ特徴的流儀が Sainte-Menehould（1732 年）、Avignon（1759 年、1769 年）、La Rochelle（1766 年）、Bordeaux（1768 年）、Lyons（1780 年）、Sedan（1788 年）で刊行された本に見つかっているからである。従って、フランスで印刷された本の前付部分の折記号で小文字アルファベットのみが使用されているのは、概して、1710 年以降の日付をもつと推定してよさそうである。とりわけイタリック体が使われているときにこのことが言える (qq)。

他方、イタリアで印刷された本ではすべてのやり方のうちでこのやり方が最もよく見られる（ただしすでに述べたように、最も特徴的だというわけではない）。他の国々と同じように 18 世紀になってから用例が増えるが、どの時期でも、とりわけ Venice と Rome で印刷された本で、使用例が見つかっている。Venice の例は 1558 年から 1788 年まで、Rome の例は 1632 年から 1787 年まで見つかる。他には Ferrara（1591 年）、Naples（1595 年頃[39]－1765 年）、Viterbo（1607 年）、Milan（1616 年）、Bologna（1639 年、1672 年）、Padua（1670 年－1728 年）、Florence（1725 年－58 年）、Brescia（1744 年）、Turin（1748 年）、Arezzo（1756 年、1767 年）、Modena（1772 年）、Genoa（1776 年）がある (rr)。

オランダで刊行された本でこの特徴的流儀が現れることは、とりわけ 17 世紀にはそれほど多くない。ただし Amsterdam で用いられた例がいくつも見つかっている（1631 年－1781 年）。Franeker で 1596 年に印刷された本、Leiden で 1595 年と 1609 年、さらに降って 1652 年と 1725 年に印刷された本でこのやり方が見つかっている（Leiden の例が少ないことが確かに注目される）。他の都市では Utrecht（1668 年、唯一の例である）、Rotterdam（1699 年－1718 年）、The Hague（1727 年－77 年）、Dordrecht（1769 年）、Maastricht（1779 年）の例がある。17 世紀の例の多くは、アステリスクまたは短剣符と組み合わせて使われているものである (ss)。

ドイツで印刷された本では 17 世紀から散発的に使われた例があるが、この場合も大部分は 18 世紀以降の刊本、とりわけ Leipzig で印刷された本でこのやり方が採用されている。刊行年は以下の通り。Vienna（1581 年、1630 年）、Linz（1617 年）、Cologne（1628 年）、Jena（1643 年）、Leipzig（1680 年）、Frankfurt（1566 年、1681 年、1698 年）、Halle（1699 年－1776 年）、Berlin（1704 年－80 年）、Hamburg（1707 年－98 年）、Strasburg（1710 年）、Tübingen（1767

[39] Tasso, *Discorsi del poema heroico*, Napoli, P. Venturini, n.d. (Bod.: 3.∆.303). おそらく 1595 年頃に印刷されたもの。

年)、Göttingen（1769 年)、Karlsruhe（1769 年)、Zweibrücken（1776 年）(tt)。

スイスで刊行された本では、初期に Basle で印刷された一群の本を除けば、18 世紀後期まで 1 例も見つからなかった。Lausanne（1765 年)、Chur and Lindau（1772 年)、Geneva（1777 年、1780 年、1782 年)、Neuchâtel（1777 年－57 年)、Basle（1797 年）(uu)。ベルギーで刊行された本でも同様の傾向がある。初期の Antwerp の例を別にすれば、Antwerp（1577 年、1643 年)、Brussels（1731 年－88 年)、Liège（1777 年）が見つかる (ww)。1 例が Stockholm（1697 年）に、5 例が Madrid（1640 年、1667 年、1753 年、1775 年、1787 年）に見いだされる (xx)。

イングランドで印刷された本は特殊な問題を提起しているので後述する。さしあたりａｂｃ（ないし場合によってはｂｃ）というアルファベット順がきちんと守られている事例は簡単に要約できる。London で印刷された本で使用されている例は 1581 年から 1798 年までで、大半は 18 世紀の本である。Oxford で印刷された本ではこの慣行は比較的一般に採用されており（1665 年－1731 年)、Cambridge で印刷された本で使用されている例は 1711 年から 1749 年までの刊本に見つかる。スコットランドで印刷された本については、調査対象がそれを適切に反映していればの話だが、18 世紀にはこの慣行に好意的なようである。Edinburgh（1711 年－71 年)、Glasgow（1748 年－63 年）に使用例がある (yy)。

aa bb cc のように文字を重ねるやり方についても付言しておこう。このやり方は 16 世紀のやり方で、Paris で印刷された本（1519 年、1560 年）と Lyons で印刷された本（1532 年、1550 年、1559 年)、および Venice で印刷された本（1588 年）に見つかっている。ただし London で 1674 年に印刷された本の例が 1 例あり、奇妙な擬古趣味と言える [40](zz)。

まとめれば、18 世紀において前付部分の折記号に小文字アルファベットが使われるようになったということから言えることは多くない。ただしフランスで印刷された本の印刷年を考えるには役立ちうる。17 世紀に印刷された本で前付部分の折記号に小文字アルファベットが使われていればイタリアで印刷された本だと考える補強的な証拠になりうる。オランダで印刷された本だとすれば Amsterdam で印刷されたと推定されうる。スイスで印刷されたとは考えにくい（スイスで印刷された本での使用例は 18 世紀中葉まで見当たらない)。

（viii）大文字のＡＢＣ

前付部分の折記号にこのような特徴的流儀が採用される例は当然ながら少ない。というのも前付部分の折記号と本文の折記号が区別できなくなってしまうからである（イングランドで印刷された本を除く)。ただし、とりわけ 16 世紀には小文字のアルファベットが本文の折記号の冒頭で使用された本がいくつかあり、その場合は混乱の可能性が避けられるので、前付部分で大文字アルファベットを使用した例がいくつかある。たとえば Paris で印刷された本では、調査対象時期が始まるよりも早い 1512 年に用いられた例があるし、他の例も 16 世紀に複数見つかっている（1552 年－99 年)。17 世紀に印刷された本に 5 例見つかっているが（1608 年－87 年)、18 世紀に印刷された本の例では本文の折記号と区別するためすべてイタリック体で記されている（1722 年、1724 年、1751 年)。Lyons で印刷された本では 1554 年から 1663 年までの例が見つかっている。また Bordeaux で印刷された本に 2 例（1593 年、1599 年)、Nîmes で印刷された本に 1 例（1769 年）が見つかっている (aaa)。

---

[40] [J.-F. Scnault], *Natural history of the passions*, In the Savoy, T.N. for J. Magncs, 1674 (Wing S2501).

イタリアで印刷された本の例はほぼすべて16世紀の刊本である。Venice（1516年－1604年）、Rome（1526年、1551年）、Vicenza（1529年）。ただしもっと遅い時期の例がCesenaで印刷された本に2例（1688年、1784年）見つかっている(bbb)。スペインで印刷された本でも同様である。Barcelona（1543年）、Saragossa（1555年）、Alcala（1580年）、Madrid（1583年）(ccc)。オランダで印刷された本でこの特徴的流儀が現れることはめったにない。Leiden（1598年、1695年、1748年）、Rotterdam（1599年、1694年）、Arnhem（1605年）、Amsterdam（1672年、1673年、1707年、最後のものはイタリック化されている）。Louvain（1566年）とAntwerp（1614年）で1例ずつ見つかっている(ddd)。またスイスで印刷された本でもBasleで印刷された本に1例（1521年）、Genevaで印刷された本に1例（1642年、特徴的な段落標と組み合わされている）が見つかっている(eee)。ドイツで印刷された本ではWittenberg（1534年、1553年）、Cologne（1537年、1649年）、Leipzig（1562年）、Altenburg（1672年）、Halle（1709年）が見つかっている。Altenburgの例では小文字のaが使われた次の折丁で大文字のBが使われているから、ほぼ間違いと言ってよい。Copenhagenで印刷された本に1例（1631年）見つかっている(fff)。イングランドで印刷された本はここでも特殊な問題を提起しているので、次節で検討する。

小文字のときと同様、大文字アルファベットの場合も16世紀には重ねて使われるときがあった。Venice（1516年）、Paris（1520年、1521年）、Basle（1550年）、Genoa（1585年）、Zurich（1592年）の例が見つかっている。

Parisで1687年に印刷された本で妙な並びの折記号が使われている例がある[41]。この例ではAからZまでアルファベットが用いられた後にAaからHhまでが続いている。これは明らかに本文折記号のアルファベットに倣っているのである。この手続きがなされる事例は他に見つからなかった。

つまり前付部分に大文字アルファベットが使われている例はおおむね16世紀に限られており、後年ではイングランドで印刷された本を除いてたいへん少ない(ggg)。スモールキャピタルが使用された例はLondonで印刷された本に1例（1799）見つかっている。

（ix）Ａａｂ等々というイングランドのやり方

本文の折記号をBから始めるという主にイングランドで印刷された本で採用されている慣行（後述〔次号〕）は当然ながら、Aはもっぱら前付部分の折記号に用いるという原則（つまり、つねに遵守されているわけではないが、通例は行われている慣行）に基づいている。前付部分がひとつの折丁だけからなるとすれば、もちろん困難は生じない。しかしそれ以上なら、さらに別の記号を振る必要が出てくる。Londonで印刷された本で問題解決のために採用された標準的なやり方は、前付部分の折記号としてAを使った後は小文字アルファベットａｂｃ等々を用いるというやり方であった[42]。記録されている最も古い例は1580年であり、次いで古い例は1611年である[43]。以下、1629年、1656年にも使われている。これ以降、とりわけ18世紀前期から1766年まで使用頻度が上がっている。他方、London以外でこの慣行が採用された例は少ないようである。Oxfordで印刷された本に2例（1677年、1715年）、Cambridgeで印刷さ

[41] P. Intorcetta *et al.*, *Confucius*, Parisiis, D. Horthemels, 1687 (W. : II.u.1).
[42] Cf. McKerrow, *Introduction*, p. 190.
[43] A. Hopton, *Speculum topographicum*, London, N.O. for S. Waterson, 1611 (STC 13783).

れた本に1例（1641年）見つかっている。調査対象中のスコットランドで印刷された本では1例も見つかっていない。

この標準的な慣行以外にもかなりたくさんの変種がありうるが、どれも基礎となる原則はおなじである。以下のやり方が見つかっている（特記ない限りすべてLondonの例）。Ab（1552年）、A ¶（1603年）、A★（1614年）[44]、A (★)（1635年）、A)(（1636年）、A (a) (b) (c)（1657年－70年）、A [★★]（1670年）、A bb Cc（1674年）、A [a] [b] [c]（1712年）、A A2（1712年）、A b c（1718年、1723年、Cambridge 1739年）、b A（1719年）、A Aa Bb（1720年）、a A（1726年）、★A ★B ★C（1740年）、A A★（1758年）、B b c（1762年）、[a] a b A（1762年）。

イングランド以外では、Barcelonaで印刷された本（1543年）にA ✠と記載されている1例[45]、Romeで印刷された本（1544年）にA aと記載されている1例、Douaiで印刷された本（1623年）にA ãと記載されている1例[46]、Amsterdamで印刷された本（1663年）にA Aaと記載された1例[47]、Dresdenで印刷された本（1689年）に同様に使用されている1例がある。

最後の3点を除けば、この特徴的流儀を採用するのはイングランドで印刷された本の特徴である。とりわけLondonで印刷された本の特徴である。そしてこのやり方が使われていれば、他の証拠によって覆らないかぎり、イングランドで印刷された本であるとかなり強く推測できる。Douaiで印刷された本の例では二つ目の記号（ã）はフランスのやり方であってイングランドのやり方ではないということを後述する(hhh)。

（x）母音字 ã ẽ ĩ õ ũ

チルダのついた母音字を前付部分の折記号として用いるのが、小論が対象とする時期の大部分で、Parisで印刷された本やParisの印刷本に倣って作られているフランスの地方都市の本の顕著な特徴のひとつとなっている。（折記号が2巡目に入ると他の記号が使われる場合もあるが、通例は母音字を2度使ってãã ẽẽ等々と表される[48](iii)。）最初の使用例は小論で検討している時期よりも早い1519年に遡り[49]、また1531年、1541年、1545年、1548年にも用いられた例がある。16世紀後半にこの慣行がひろく採用されるようになり、17世紀にはほとんどどこでも使われるようになった。18世紀でも1730年頃までは活発に使われていたが、それを過ぎると少なくなっていく。明白な最も遅い例は1755年である[50]。1759年にも1例があるが、出版事項にはParisとあるものの地方都市で印刷されたことがかなり明らかである[51]。これらの調査結果とすでに述べたａｂｃというやり方との関連を考える必要がある。転換点は1730年頃だが、1710年頃から1750年頃まではどちらの形式も共存していた。少なくとも235年にわたってひとつの慣行が綿々と受け継がれるという印象的な例がここでも見られる。

---

[44] これら2つのやり方についてはHenrietta C. Bartlett, 'Quarto editions of *Julius Caesar*', *The Library*, III, iv (1913), 128を参照。

[45] 前掲115頁の註29を参照。

[46] *Les Evangiles et Epistres*, Douay, I. Bogart, 1623 (W. : II.u.i).

[47] F. D. Sylvius, *Disputationum medicarum pars prima*, Amstelodami, J. van den Bergh, 1663 (W. : HH. $\pi\gamma$. 18)

[48] FIG. 3を参照。

[49] Politian, *Omnium operu, …*, Parrhisiis, Iodocus Badius Ascensius, 1519 (W. : P.6.27).

[50] Cochin and Bellicard, *Observations sur les antiquités d'Herculanum*, Paris, C.A. Jombert, 1755 (R.S.)

[51] Buffier, *Geographie universelle*, Paris, P.-F. Giffart, 1759 (R.S.)

mentariorum in Zachariam prophetam, cap. XIV. ubi, cum de excidio Hierosolymitano esset locutus, addit ista: *Hæc omnia plenissime Iosephus, qui Iudaicam scripsit historiam: eo multo majora, quam legimus in Prophetis, eos sustinuisse*

ẽ ẽ iij

FIG. 3. Tacitus, *Opera*, vol. I, Parisiis, apud Viduam Claudii Thiboust et Petrum Esclassan, 1682

地方都市では Rouen で印刷された本はいずれにせよ 17 世紀には Paris の慣行にかなり類似しており、その例が 1601 年のものから 1675 年のものまで見つかる。Lyons で印刷された本はもっと複雑である。最も古い例は 1582 年の刊本で、以下数少ないが 1650 年まで用いられている。しかし特徴的流儀が標準的な慣行のようになるのは 1650 年になってからにすぎない。もちろんこれはかつて印刷業の独立的な中心であった Lyons が没落し、しだいに Paris の慣行を採用していくようになることの反映である。Lyons で最後に用いられている例は 1768 年であるが[52]、これは地方都市のタイムラグの事例といえるかもしれない。フランスの地方都市の例は他にも Bordeaux（1576 年、1601 年）、La Rochelle（1578 年）、Tours（1592 年）、Tournon（1604 年、1616 年）、Saint-Omer（1614 年）、Niort（1616 年）、Le Désert（=Maillé）（1616 年）、Saumur（1620 年、1674 年）、Toulouse（1621 年、1643 年）、Pont-à-Mousson（1622 年）、Douai（1623 年、1629 年）、Nancy（1627 年）、Orthez（1639 年）、Saint-Malo（1650 年）、Trévoux（1702 年）、Avignon（1743 年）がある。これらの諸例から、vowels を前付部分の折記号として用いるのがフランスで印刷された本の特徴ではあるが、地方都市では Paris ほど頻繁に用いられたわけではなかったということがわかる (kkk)。

もちろんそれがフランスで印刷された本と判定するための証拠となるためには、フランス以外で印刷された本では見当たらない、あるいは少なくともあまり用いられないということを示さなくてはいけない。Brussels で印刷された本で用いられた例が 2 例（1700 年、1702 年）と Antwerp で用いられた例が 1 例（1700 年）あるが、フランスの慣行を模倣するという自然的傾向があるわけで、結論は揺るがない。妙なことにスイスで印刷された本に用いられた事例は 1 例（Coligny 1616 年）のみであった。イタリアの例も 1 例（Venice 1729 年）である[53]。ドイツで印刷された本に用いられている例が少数あるが、16 世紀後期から 17 世紀前期までの刊本である。すなわち、Frankfurt（1576 年、1577 年、1625 年）、Cologne（1640 年）である。また後年の例が 1 例ある（Frankfurt 1716 年）(lll)。

しかしオランダで印刷された本に多くの例が見つかっており、ここで真の難問に直面する。つまりそのうちの少なくとも一部は偽版かもしれないということである。初期の事例は Leiden（1609 年）があるが、多くは 17 世紀末かそれ以降に印刷されている。Amsterdam で印刷された本の例（1676 年－1728 年）ではほとんどすべての出版事項にフランスに根をもつ出版業者の名前が記されている（David Mortier、Henri and Jacques Deshordes、J. F. Bernard）。The Hague で印刷された本で使用された例のうち 1 例でもおなじことが起こっている（Gosse and Néaulme 1732 年）。他の例は 1701 年から 1754 年までに印刷された本である。

---

[52] Maupertuis, *Œuvres*, Lyon, J.-M. Bruyset, 1768, vol. i. (R.S.)

[53] Du Cange, *Historia byzantina*, Venetiis, B. Javarina, 1729 (W. : M.6.24).

Rotterdam で印刷された本でも 1 例（1694 年）見つかっている (mmm)。

チルダを書かないやり方が採用される例はたいへん少ないようである。明らかな例は 1 例（Amsterdam 1699 年）だけしか見当たらない[54]。これはフランスのやり方を真似したものであろうと推測される。Paris で印刷されたある本（1552 年）[55] には āa ēe īi という奇妙な折記号の並びが見つかるが、これとおなじやり方をしている他の例は見つかっていない。

つまり概して、チルダのついた母音字を前付部分の折記号として用いるやり方が採用されていれば、フランスで印刷された本だという強い推測がただちに成り立つ。とりわけ Paris で印刷された本と推測される。ただしこのやり方は 1575 年から 1640 年までにドイツで印刷された本と、場合によっては 17 世紀後期および 18 世紀前期にオランダで印刷された本でも見つかる。Paris で印刷された本では 1760 年よりも前に印刷されたと推測される。

（xi）ギリシア文字$\alpha\beta\gamma$を用いるやり方

このやり方は人文主義の反映であって、ほぼ 16 世紀に限られる。とりわけ Basle で印刷された本の特徴的なやり方で、1533 年から 1582 年まで頻繁に使われている。Zurich で印刷された本（1556 年、1559 年）でも使われている。スイス以外ではほとんど見られない。Strasbourg（1539 年、1566 年 ）、Leipzig（1562 年 ）、Venice（1563 年 ）、Paris（1570 年 ）、Frankfurt（1589 年）、Leiden（1600 年）の例がある。従ってギリシア文字が使われていれば Basle またはドイツ語圏スイスで印刷されたと推測しうる (nnn)。

（xii）他の記号

以下の記号の使用例は 1 例または数例しか見つかっておらず、頻度が少なすぎるので結論を導くことができない (ooo)。

（葡萄葉）Antwerp（1534 年、1541 年）、Paris（1541 年、1542 年、1548 年、1553 年）
Basle（1538 年）
Florence（1548 年、2 点）、Poitiers（1550 年）、London（1603 年）
London（1560 年）
Basle（1567 年）
Siena（1572 年）
Poitiers（1560 年）
& La Rochelle（1581 年）
London（1544 年、1561 年、1566 年）、Ferrara（1588 年）
（オークの実）Hanau（1606 年）
(∵) The Hague（1660 年）、Bordeaux（1601 年）
Madrid（1667 年）、Venice（1576 年）(ppp)

（以下次号）

[54] Daviler, *Cours d'architecture*, Amsterdam, G. Gallet, 1699, vol. i (W .: B.t.12a). 前付部分の折記号の順序は以下の通り。* e i o u aa ee ii oo uu u*. 第 2 巻は通常のオランダの慣行に従っている。
[55] P. Lizetius, *Aduersum pseudoeuangelica, hœresim*, Lutetiae, D. le Preux, 1552 (W. : FF.c.2).

註

Sayce 論文の全体構成は以下の通り。

I. 折記号
  1. 前付部分の折記号
  2. 本文の折記号に用いられるアルファベット
  3. 折記号の数字の記載の仕方
  4. ピリオド A.ij.
  5. 行のどこに折記号を配置するか
  6. 折記号が記されている紙葉の数

II. キャッチワード

III. ページ付け

IV. プレス・フィギュア

V. 出版事項の年の記し方

VI. 国別の要約

VII. 結語

紙幅の都合で本号ではI.1.のみを扱う。

(a) 15 世紀末、あるいは 1630 年代頃に近代的な印刷本の作成方法が確立したとき、本の識別に役立てるため、巻頭の 1 ページに全体の内容やさらに進んで本の題名、また製作者の情報を手短かに記すというやり方が一般化した。このページを標題紙（title-page）と呼ぶ。出版事項（imprint）は通例標題紙の下部に記されているものだが（ただし、その左ページや裏ページ、また巻末の奥付部分に記されている場合もある）、出版地、出版者、印刷者、頒布者、出版年等から構成されている。しかし、かならずしもすべての事項が網羅されているわけではなく、印刷者情報が他に記されている場合もあり、さらにもっとよくある場合には単に記されていない。図 1 はカント『人倫の形而上学』の例である。人倫の形而上学は「法論の形而上学的基礎」と「徳論の形而上学的基礎」からなる。上記の標題紙（右ページ）には「徳論の形而上学的基礎」という題名、著者名、出版地、出版者（印刷者）、刊行年が記されている。左ページは副標題紙（added title page）と呼ばれるもので、ドイツの出版物によく見られ、「人倫の形而上学」という総合タイトルと全体の巻数、またこの場合は標題紙と同じことだが著者名、出版地、出版者、刊行年が記されている。この例は 18 世紀末の事例なので、初期の例に比べて大幅に簡素化されていることに注意。

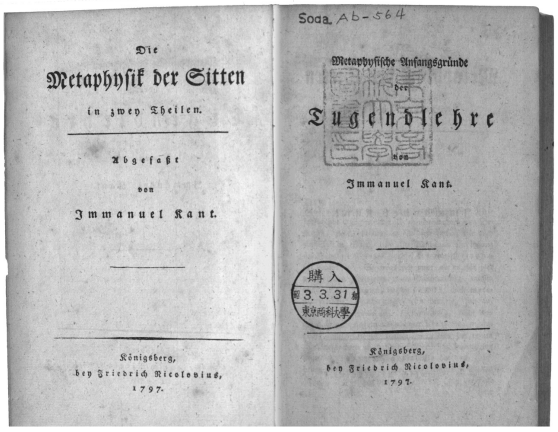
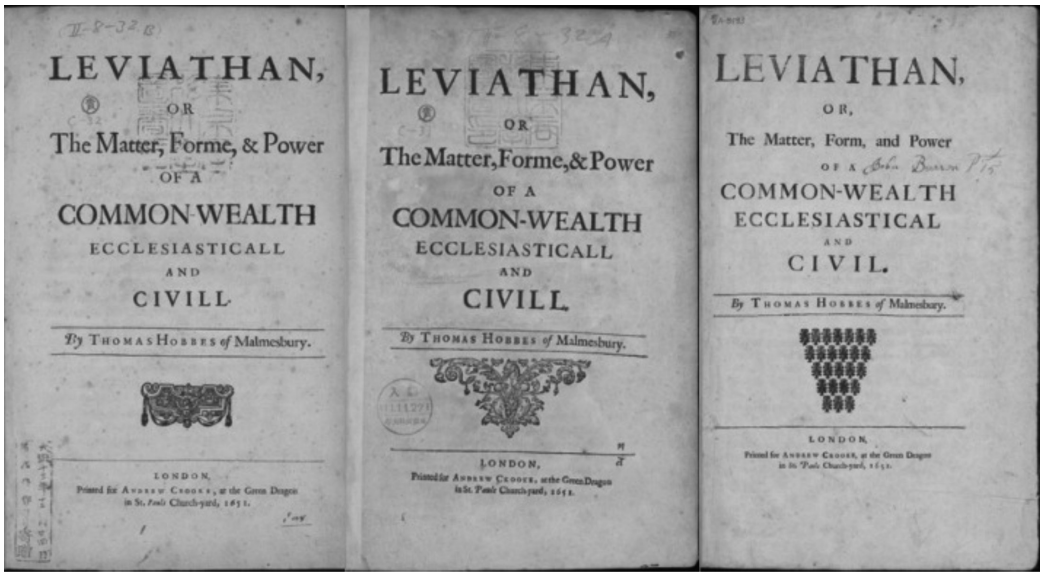


図 1　カント『人倫の形而上学』

(b) Sayce の註 1 で述べられているように、料紙や活字をもとにして印刷地を推定する試みは、それらが国際的に流通していたという事実によって一般的な制約を被っている。しかし重要性は明らかであり、今日なお印刷地推定の指標になっている。マクドナルドとハーグリーヴズによれば、ホッブズ『リヴァイアサン』には初版刊行年である 1651 年の日付が出版事項に記載された見た目の異なる 3 つの版があるが、そのうち 2 つは使われている活字が Van dyck


LEVIATHAN,
OR
The Matter, Forme, & Power
OF A
COMMON-WEALTH
ECCLESIASTICALL
AND
CIVILL.
By THOMAS HOBBES of Malmesbury.
LONDON,
Printed for ANDREW CROOKE, at the Green Dragon in St. Paul's Church-yard, 1651.

LEVIATHAN,
OR
The Matter, Forme, & Power
OF A
COMMON-WEALTH
ECCLESIASTICALL
AND
CIVILL.
By THOMAS HOBBES of Malmesbury.
LONDON,
Printed for ANDREW CROOKE, at the Green Dragon in St. Paul's Church-yard, 1651.

LEVIATHAN,
OR,
The Matter, Form, and Power
OF A
COMMON-WEALTH
ECCLESIASTICAL
AND
CIVIL.
By THOMAS HOBBES of Malmesbury.
LONDON,
Printed for ANDREW CROOKE, at the Green Dragon in St. Paul's Church-yard, 1651.

図２　1651 年という刊行年が記された３つの『リヴァイアサン』（社会科学古典資料センター所蔵）

と呼ばれる活字であることから、オランダで印刷出版されたものと推定できるという（図 2）。Cf. Hugh Macdonald and Mary Hargreaves, Thomas Hobbes, A Bibliography, London, The Bibliographical Society, 1952.

(c) 折記号については後述。キャッチワードについては次号で説明する。丁付け（foliation）とは本の各紙葉の一枚ごとに番号を振ることを指し、ページ付け（pagination）とは各ページに番号を振ることを指す。

(d) この論文で後述されているように、グレートブリテンを構成するイングランド、ウェールズとスコットランドは同一の慣行に従っている場合もあれば、多少とも異なる場合がある。従って Sayce はこれらの地域に属する諸都市（イングランドでは London、Oxford、Cambridge 等、スコットランドでは Edinburgh、Glasgow 等）を一括して扱うときと、別々に論じている場合がある。

(e) 社会科学古典資料センターが行った調査の対象は、メンガー文庫、ギールケ文庫、左右田文庫の全体、フランクリン文庫の一部、一般貴重書の一部（貴 B ～貴 J と三浦文庫その他の小規模な特殊文庫）である。ただしそれぞれの文庫には 1801 年以降に印刷された本が相当数含まれるので、当然ながらそれらは除外した。センター所蔵資料を構成する他の大きな文庫にベルンシュタイン＝スヴァーリン文庫があるが、ほぼすべて 19 世紀以降の印刷物である。印刷物が対象であるからマニュスクリプト類は除き、また印刷物であっても極端に短いもの（7 ページ以下）は除外した。合冊製本されている場合には、私製合冊の疑いが残る場合には別々の刊行物とみなし、刊行時から合冊が意図されていた（同一の工程で印刷された）とみなせるときにはまとめることにした。

(f) インキュナブラ（incunabula. 揺籃期本）とは一般に、グーテンベルクによる印刷術の発明によって実現された最初の印刷本以降 15 世紀に出版されたすべての本を含み、そこでは中世の伝統的な写本の様式を引き継ぎながら、印刷本の制作・流通等に適した新しい様式が模索されている。このためその後一般的になる様々な様式がインキュナブラには含まれないことが多い（とりわけ、標題紙に題名や出版事項を記載するといったやり方等）。ただしこうした模索

は実際には16世紀初頭に入ってからも続いていたといわれる。Sayceが検討対象を1630年以降の本に限定したのはこのような事情による。しかしセンターで行った調査では、数が少ないため1601年～1630年の本も調査に含めている。

(g) 19世紀以降製紙技術の革新や活字鋳造機や動力印刷機の発明など本の大量生産を可能にする条件が満たされるようになり、読者層の広がりによって大量流通も実現した。これに伴い本の形式もそれまでとは変化が生じた。

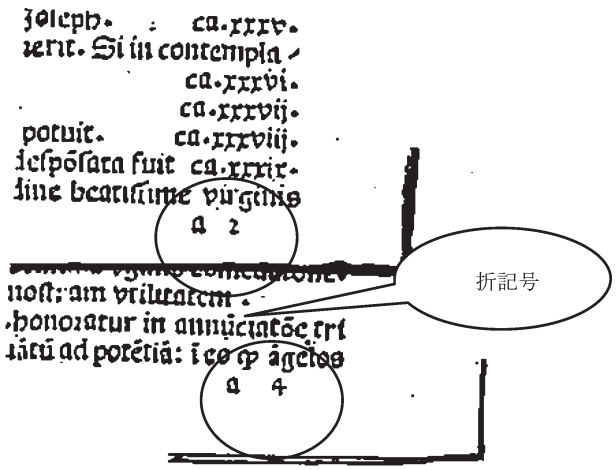


図3 出典：髙野彰『増補版洋書の話』丸善(一部改変)

(h) 一冊の本は、いくつかの紙葉を重ねてひとまとめに折りたたんだもの（gathering or quire. 折丁とか丁と訳される）をなんらかの仕方で束ねて綴じることによってできあがっているが、製本工が折丁を綴じる順序を間違えないよう紙葉につけられた記号が、折記号（signature、折丁記号とも訳される）である。通常、各折丁のはじめのいくつかの紙葉の表側の下部につけられている。本のページづけがしばしば省略されたり、内容に応じてさまざまに変化されるのに対して、折記号はほとんどの場合一冊の本を通じて連続しているが、本文と前付部分で別の折記号を与えている場合がある。通常、折記号は折丁ごとに与えられた順序づけと、折丁内の紙葉の順番を示す数字から成り立っている。以下Sayceを敷衍すれば、順序づけにラテン文字の大文字または小文字のアルファベットが用いられる場合、J(j)、U(u)、W(w)を除く23文字が用いられ、Zまで到達すると、AaとかAAなどのように重ねて書いた。また、*などの記号が使われる場合もあった。この場合、**などのように、記す回数によって順序を表現することがあった。ひとつの折丁内の紙葉の順番は、ローマ数字やアラビア数字などの数字で表現されることが多かった。図3では「a 2」「a 4」という折記号が記されているが、これは通常なら「a」という折丁内のそれぞれ2番目の紙葉、4番目の紙葉に記されるものである。すべての紙葉に折丁が記されている場合もあるが、多くの場合（前半の紙葉に折記号を記せば残りの順序はおのずと決まるので）折丁の途中までしか書かれなかった。

図4

(i) 前付部分（preliminaries）とは、序文（introduction, etc.）や前書き（preface, préface, Vorzort, etc.）など、本文に先行する要素であって、本文とは異なる折記号が付されていることによって区別できる部分である。前付部分には本文とは異なるページ付けがされていたり、ページ付けが省略されていることも多い。本によっては、前付部分を構成するさまざまな要素（献辞、目次、序文等）のそれぞれに異なるタイプの折記号を与えている場合もある。図4

の資料（Immanuel Kant, Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels, Königsberg und Leipzig, 1755）では、冒頭の献辞を記したページの折記号には小文字アルファベットのaが与えられているが（この場合標題紙がa1に相当している）、それに続く序文ページの折記号では丸括弧に括られた大文字アルファベット(A)が与えられている。しかし、つねにこのような区分がされているわけではなく、前付部分を通じて同じタイプの折記号が与えられている場合もある。

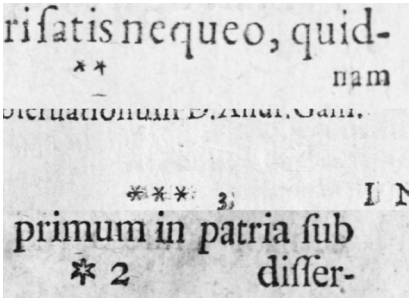


図5

(k) アステリスクの形状はさまざまである。図5上段や中段のようなものが比較的多い（この2つはいずれも同じ書籍のものであるが、上段のものが5本線で構成されているのに対して、中段のものは6本線である。A. Gaill, Practicarum observationum, Ed. postrema, Coloniæ Agrippinæ, Apud Ioannem Gymnicum, 1592. ひとつの本でも使われている文字の形状が同じとは限らないことがわかる）。下段は比較的珍しい白抜きの形状（Martin Knutzen, Systema causarum efficientium, Editio altera auctior et emendatior, Leipzig, Apud Io. Christian. Langenhemium, 1745）。

(l) センター所蔵資料で調査した中でオランダで印刷ないし出版されたと明示されている本は全部で596件あった（このうち折記号の記された前付部分のあるもの336件（括弧内は以下同様））。印刷地がオランダであると明示されているもの108件（61件）、出版地がオランダであると明示されているもの558件（307件）、そのうち前付部分の折記号にアステリスクが用いられているのは、印刷地が明示されているもので36件、出版地が明示されているもので193件、いずれかが明示されているもので207件であった。従って折記号の記された前付部分のある書籍に限れば、いずれのケースでも全体の5～6割程度でこのやり方が採用されていることになる。センター所蔵資料でアステリスクが見られる最も古い例は1605年（De re monetaria veterum Romanorum, Leyden, Gothardus Vœgelinus）、次いで1613年にPlantin-Raphelengiusで出版された本（Wilebrordi Snellii R.f. De re nummaria liber singularis、出版地が記載されていないが印刷者名からLeydenで印刷されたと推定される）であり、最も遅い例は1799年（Immanuel Kant, Elementa metaphysica iuris doctrinae, Amstelaedami, Apud Petrum den Hengst, 1799）であった。折記号の記された前付部分のある書籍の出版年（または印刷年）を1世紀ごとに区切れば、16世紀7件中0件（0%）、17世紀143件中90件（63%）、18世紀196件中117件（60%）である。同じ条件で印刷地または出版地別にすると、Amsterdam 170件中104件、Leiden 105件中58件、The Hague 44件中22件、Utrecht 11件中10件、Rotterdam 6件中5件であった。アステリスクの長々しい連なりもしばしば見られる（図6はBeausobre, Histoire critique de Manichée et du manicheisme, v. 1, A Amsterdam, Chez J. Frederic Bernard, 1734の例）。

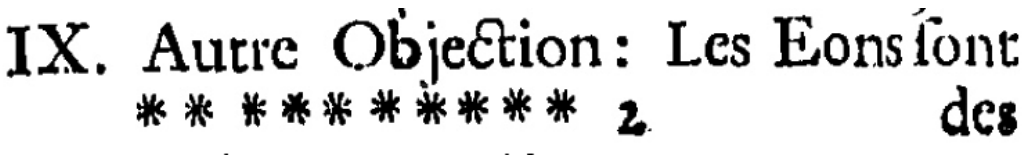


図6

(m) ベルギー北部はオランダ語（フラマン語）地域であり、センター所蔵本から判断してもAntwerp、Ghent、Louvainの書籍はオランダ語のものが比較的多い。今回調査した資料のうち前付ページに折記号が記されていて出版地または印刷地にAntwerpと明記されている本は11件、うち5件にアステリスクが使用されていた（1570年－1719年）。Louvainでは8件中3件（1634年－1682年）。Ghentの本には前付ページがあるものは1件しかなく、折記号にアステリスクは使用されていない。ただしBruxellesで出版ないし印刷された本4件中2件（1653年、1712年）、Liègeで出版ないし印刷された4件中2件（1767年、1788年）でもアステリスクが使われており、しかもいずれもフランス語本であった。いずれにせよ件数が少なすぎるので結論は引き出せない。

(n) センター所蔵本のMes loisirs, ou, Pensées diverses de Mr. le chevalier d'Arc, Paris, 1756でも図7のように*2という折記号を用いている（*2折丁の2枚目なので*2 ijとなっている）。Sayceが挙げているのもParisで出版されている例だが、Parisにだけ限られる現象なのかどうか今後検討すべきである。一方、図8は3つのアステリスクが一組になっている例であるが、これはLondonで1654年に出版されたグロティウス『戦争と平和』英訳に記されていたものである（Hugo Grotius, *The illustrious Hugo Grotius of the law of warre and peace*, London, Printed by T. Warren, for William Lee, 1654）。これが本当にLondonで印刷されていれば、3つ一組のアステリスクの使用例はオランダに限られるわけではないということになる。センターの調査ではたくさんのアステリスクが組になっている例はこの他に見つからなかった。

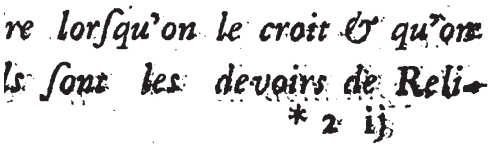


図7

図8

(o) センター所蔵資料で調査した中では、印刷地がフランスであると明示されているもの652件（177件）、出版地がフランスであると明示されているもの1,314件（478件）、印刷地ないし出版地がフランスであると明示されているもの1,494件（562件）であった。そのうち前付部分の折記号にアステリスクが用いられているのは、印刷地が明示されているもので15件、出版地が明示されているもので43件、いずれかが明示されているもので46件にすぎず、折記号が記されている書籍のそれぞれ8～9%程度を占めるにすぎない。Parisの使用例は1552年以降18世紀の終わりまで続いており、すべてが出版事項を偽っているとは言えなそうである。なお前書きページの折記号ではアステリスクを使っていても、前付されている目次（索引）ページの折記号では小文字アルファベットを用いている例が複数見られた。

(p) センターの調査結果では、印刷地がスイスと明示されているもの69件（40件）、出版地がスイスと明示されているもの203件（91件）、どちらかがスイスと明示されているもの219件（102件）のうち、アステリスクが用いられているのはそれぞれ3件（8%）、10件（11%）、11件（11%）であった。Basle（1574年、1581年、1776年）、Geneva（1616年、1651年、1778年）、Geneva and Lausanne（1745年）、Zurich（1768年）、Bern（1772年）、Lausanne（1773年）、Geneva and Paris（1785年）でアステリスクが使用されている。Neuchâtelの刊本は（少なくとも明記されているものは）所蔵数が少なく、アステリスクが使用された例は見つからなかった。これだけから量の多寡について判断はできないにせよ、Sayceの調査とあわせると、少なくとも17世紀にBasleとZurichで使用された例はまだ見つかっていないことになる。

(q) センターの調査結果では、印刷地がイタリアと明示されているもの 58 件（35 件）、出版地がイタリアと明示されているもの 269 件（175 件）、どちらかがイタリアと明示されているもの 288 件（182 件）のうち、アステリスクが用いられているのはそれぞれ 13 件（37%）、49 件（28%）、52 件（28%）であった。世紀ごとに区切ると、16 世紀 77 件（54 件）中 22 件（41%）、17 世紀 84 件（65 件）中 9 件（14%）、18 世紀 120 件（60 件）中 21 件（35%）であり、確かに 17 世紀には少ないことがわかる。17 世紀の使用例は Florence（1605 年）、Venice（1629 年、1664 年）、Torino（1630 年）、Macerata（1659 年）、Verona（1667 年）、Bologna（1671 年）、Rome（1689 年、1690 年）である。全体を通じて Naples や Vicenza の例は見つけられなかったが、調査点数も限られている。

(r) センターの事例も少数だが、Barcelona（1734 年）、Madrid（1772 年、1777 年、1791 年）が見つかっている。

(s) センターの調査結果では、印刷地がドイツ（オーストリアを含む）と明示されているもの 338 件（190 件）、出版地がドイツと明示されているもの 1,713 件（1,050 件）、どちらかがドイツと明示されているもの 1,827 件（1,100 件）のうち、アステリスクが用いられているのはそれぞれ 26 件（14%）、221 件（21%）、226 件（21%）であった。16 世紀 27 件中 3 件（11%）、17 世紀 220 件中 16 件（7%）、18 世紀 848 件中 206 件（24%）である。従ってセンターの調査結果から見る限り、ドイツの使用例は 16 世紀にある程度見られた後、17 世紀には若干減るが、18 世紀にかなり増えていることになる。そのうち最も古い例は Cologne で 1574 年に出版された本、もっとも遅い例はそれぞれ Berlin、Göttingen、Hamburg、Leipzig、Stuttgart および Weimar で 1800 年に出版された本であって、そのあいだほぼ切れ目なく例が見られた。Strasbourg で印刷または出版された本のうちセンターで調査したのは 42 件で 1527 年から 1795 年までだが、アステリスクの使用例はなかった。北欧では Copenhagen（1757 年、1758 年、1794 年）、Copenhagen and Leipzig（1772 年、1785 年）、現ラトビアの Riga でも 7 例（1785 年、1786 年、1792 年、1797 年（2 例）、Riga and Leipzig 1768 年、St. Petersburg, Riga and Leipzig 1789 年）見つかっている。いずれも 18 世紀の例だが、これらの地域についてはそもそも 18 世紀の本しか所蔵していない。

(t) センターの調査結果では、印刷地がイングランドと明示されているもの 776 件（219 件）、出版地がイングランドと明示されているもの 1,709 件（554 件）、どちらかがイングランドと明示されているもの 1,859 件（590 件）のうち、アステリスクが用いられているのはそれぞれ 12 件（5%）、30 件（5%）、35 件（6%）にすぎなかった。16 世紀 9 件中 2 件、17 世紀 105 件中 10 件（10%）、18 世紀 478 件中 23 件（5%）である。これに対して、スコットランドと明示されているものはそれぞれ 39 件（23 件）、64 件（32 件）、71 件（35 件）であるが、アステリスクの使用例は一件も見つけられなかった。アイルランド（すなわち Dublin）と明示されているものについてはそれぞれ 56 件（18 件）、73 件（23 件）、88 件（29 件）であるが、アステリスク単独の使用例は 1795 年に印刷された本一冊のみであり、他に短剣符と組み合わされて使用された例が 1682 年に印刷された本で見つかった。

(u) 調査点数が限定されているために信頼区間の問題はあるが、国別に見るとき対照は明確と言ってよさそうである。すなわちオランダやベルギーのオランダ語圏で前付部分の折り記号にアステリスクを用いるやり方は 17・18 世紀を通じて広く見られるが、他の地域では比較してそれほど用いられず、とりわけ 17 世紀にはあまり流行していない。ただし、センターの調査結果で前付部分の折記号にアステリスクが用いられていた総件数 609 件に対して、最も数多

かったのはドイツで印刷ないし出版された本 226 件（37%）であり、次いでオランダで印刷ないし出版された本 207 件（34%）であった。これはドイツで印刷ないし出版された本の調査点数がオランダのものの 3 倍超であるためであるが、そもそも出版点数の総計が国ごとに違うわけだから、Sayce が目標にしている応用的な利用（印刷地の推定）については単純な計算ではすまなそうである。

(w) 短剣符とは図示したような短剣上の記号で、英語の dagger の訳語である。しかしこの記号は obelisk または obelus と呼ばれることもある。フランス語でいう obèle はもともと写本時代に本文注釈のために使われたもので、『百科全書』に従えば、古代のキリスト教神学者オリゲネスが旧約聖書の比較対照の際、ヘブライ語原典にはないが七十人訳には記載されているテキストを明示するために用いたのがはじまりであるという（反対にヘブライ語原典にあるが七十人訳聖書にないテキストを明示するためにはアステリスクを用いた）。ただし、オリゲネスが用いた記号は単なる横棒のようなもので、必ずしも短剣状とは言いがたい。

(x) センターの調査結果で前付部分の折記号に短剣符が使われていた総件数 61 件のうち最も数多かったのはイタリアで印刷ないし出版されたと明示されている本 18 件であり、以下ドイツ 17 件、スイス 9 件、フランス 9 件、オランダ 3 件と続く。イタリアで印刷されたと明示されている本に限定すると 4 件（11%）、出版されたと明示されている本では 17 件（10%）であった。世紀別では、16 世紀（後半）に 7 件、17 世紀に 8 件、18 世紀（後半）に 3 件である。ただし、そのうち最も早い例である Venice（1553 年）ではアステリスクと組み合わせて（最初の折丁の折記号としてアステリスクが用いられた後、5 つの折丁で）短剣符が使用されている。Venice の例は他に 1565 年、1599 年、1607 年にも見つかるが、それ以降は見つからなかった。なお Venice で印刷ないし出版された本は 1517 年から 1799 年までに刊行された 128 点調査され、そのうち折記号のある前付部分が含まれるのは 1518 年から 1799 年までの 77 点であった。Rome の例は 1595 年（2 冊）、1615 年、1631 年の 4 件。他は Florence（1587 年、1638 年、1769 年）、Milan（1599 年、1621 年）、Bologne（1602 年、1671 年、1693 年）、Genoa（1768 年（2 冊））である。

(y) センターの調査結果ではオランダで出版されたと明示されている本 4 件で短剣符の使用例が見つかったが、その内訳は Leiden（1580 年）、Amsterdam（1735 年、1751 年）であり、さらに Amsterdam（1757 年）でアステリスクと組み合わされて短剣符が使用されている。

(z) センターの調査で見つかった短剣符が連続して使用されている興味深い例を掲げる（図 9）。この例では連続した短剣符の傍らに符号の総数（14 個）が記されている。これは前掲 Gaill の索引ページの折記号に用いられているもの。

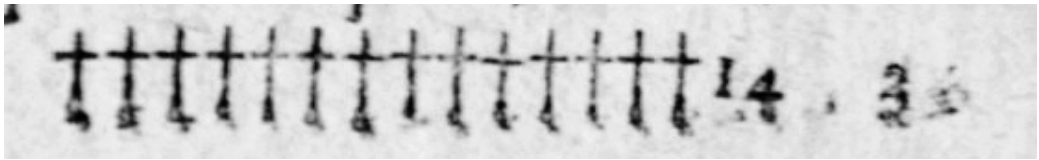


図 9

(aa) センターの調査では Paris で 1580 年に印刷されたと明示されている本 1 件と、Paris で 1561 年と 1577 年にそれぞれ出版された本計 2 件、Lyon で 1588 年、1685 年（2 冊）、1686 年、1737 年に出版された本、Montbeliard で 1599 年に出版された本 1 件に短剣符の使用例が見つかった。17 世紀以降は Lyon の 3 件のみであった。

(bb) センターの調査ではベルギーの本では短剣符の使用例を見つけられなかった。

(cc) センターの調査ではスイスで印刷されたと明示されている本5件（13%）、出版されたと明示されている本6件（7%）、印刷ないし出版されたと明示されている本9件（9%）で短剣符の使用例が見つかった。Sayceの説明と異なり、まったく少ないとまでは言えない。最も古い例はGeneve（1651年）であるが、それ以外は18世紀の本である。

(dd) センターの調査ではドイツで印刷されたと明示されている本7件（4%）、出版されたと明示されている本16件（2%）、印刷ないし出版されたと明示されている本17件（2%）で見つかった。1590年代3件、17世紀前半8件、1700年から1751年まで5件、1795年1件である。結論を出すには件数が少なすぎるとはいえ、時代的な偏りはあるかもしれない。

(ee) イングランドの使用例はLondon（1789年、1794年）の2例のみであり、スコットランドの使用例は見つからなかった。Dublinで1682年に印刷された本にアステリスクと組み合わされて使用された例が見つかった。

(ff) センターの調査で短剣符の使用が確認された他の例は、Barcelona（1677年）、Philadelphia（1771年）のみであった。

(gg) センターの調査でもSayceの調査でも短剣符の使用例は16世紀前半には見つかっていない。それ以降も主要に用いられるわけではないが、イタリアやLyonで使用例が見られる。また16世紀後半にはフランス、17世紀後半・18世紀にはスイス、16世紀末－17世紀前半および18世紀前半にはドイツでも使用例がある。イギリスとアイルランドでは稀である。

(hh) センターの調査結果では段落標が用いられている例は全体でも38件にすぎない。そのうち印刷地または出版地が明らかな例は、16世紀後半ではDelft（1581年）、London（1585年、1599年）、Paris（1591年）、Geneve（1596年、1599年）の6件、17世紀（1602年－1666年）ではLondon（1602年、1613年、1614年、1647年）、Frankfurt（1615年）、Geneve（1621年、1656年）、Madrid（1626年）、Oxford（1634年）、Cordoba（1642年）（2件）、Ferrara（1650年）、Genoa（1666年）の13件、18世紀（1720年－1800年）ではRouen（1720年）、Madrid（1728年、1733年、1738年（2件）、1753年（2例）、1780年、1785年）、Zaragoza（1740年）、Genoa（1768年）、Florence（1770年）の12件である。イタリアでは見つからないという主張は修正が必要だが、他の点は追認する結果となっている（一般には16世紀後半から17世紀前半頃までに時折用いられたやり方であり、ただしスペインでは18世紀に至るまで散見される）。段落標の実例は図10（最上段はJean Bodin, *De republica libri sex*, [Paris], Apud Iacobvm Dvpvys, 1591、2段目は、Jacques Godefroy, *Tractatus novus et practicus de salario repetitæ prælectionis*, Genevæ, Apud Petrum Chouët, 1666、その下の2例はどちらもJuan Escobar del Corro, *Tractatus tres selectissimi, et absolutissimi*, Cordubæ, Apud Salvatorem de Cea Tesa, 1642で使われており、同一書籍の中でもまったく同一とは限らない例）。

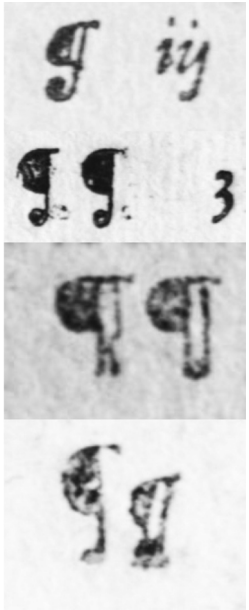


図10

(ii) センターの調査結果でも節標の使用例が見いだされたのは全部で15件にすぎなかった。17世紀（1643年－1694年）ではParis（1643年、1664年）、Lyon（1649年）、Madrid（1675年）、Genoa（1692年）、Ghent（1694年）、18世紀ではGeneve（1707年）、Florence（1719年）（2件）、

Cologne（1729 年）（2 件）、Barcelona（1734 年）（2 件）。Madrid（1781 年）、Paris（1793 年）である。ただし Genoa（1692 年）は第 2 折丁からはアステリスクが用いられている。オランダ、イギリスの本では使用例が見つけられなかった。ただし Ghent の例はオランダ語本である。

(kk) センターの調査結果でギリシア十字ないしマルタ十字が用いられている例が 18 件だけ見つかったが、そのうち 16 件はイタリアで印刷ないし出版された本であった。Venice の例が 16 世紀に 2 件（1528 年、1537 年）、17 世紀に 6 件（1647 年－1672 年）含まれる。イタリア以外の都市は Geneve（1751 年）、Frankfurt（1618 年）である。いくつかの実例を紹介しておく（図 11、左上から右へ）。

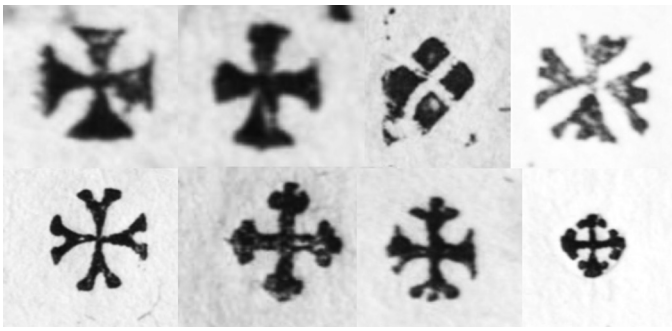


図 11

Palladius, *Palladio dignissimo et antiquo scrittore della agricultura tradutto uolgare*, Impresso in Vinegia per Nicolo di Aristotile, 1528 ; *Leges Longobardor[um]*, Venetijs, Impensis [ver] o dni Melchioris Sessa, 1537 ; Jean de Silhon, *Il ministro di stato*, In Venetia, Presso Marco Ginammi, 1647 ; Justus Lipsius, *De re nummaria breviarum*, Patavii, Typis Pauli Frambotti bibliopolæ, 1648 ; Giovanni Domenico Peri, *Il negotiante*, In Venetia, Appresso Gio. Giacomo Hertz, 1662 ; Matthias Kramer, *Il segretario di banco, ovvero, Stile di corrispondenza mercantile*, In Firenze, Nella Stamperia di Bernardo Paperini, 1738 ; Pierre Giraudeau, *La banque rendue facile aux principales nations de l'Europe*, A Genes, Chez Yves Gravier, 1769.

(ll) センターの調査でも、逆順の丸括弧のみまたはなんらかの記号を逆順の丸括弧で囲んだものを前付部分の折記号のしるしとして用いるやり方がされている総件数 429 件のうち 409 件（93%）がドイツで印刷ないし出版された本という結果になった。ドイツで印刷ないし出版された本の調査件数 1,100 件のうちでも 37% を占めており、最もよく見られるやり方であった。なおドイツで印刷されたと明示された本に限定すると 87 件（46%）、出版されたと明示されている本に限定すると 393 件（37%）である。):(の最後の使用例は Göttingen（1777 年）であった。なお Strasbourg で印刷ないし出版された前付部分に折記号のある本の調査点数は 1531 年から 1786 年までの 18 件で、うち 7 件で逆順の丸括弧が使われていた。他は大文字アルファベットが 9 件、小文字アルファベットが 2 件あった。また逆順丸括弧の使用例は 1597 年から 1708 年までの本だが、そのうち 6 件で):(が使われていた。図 12~15 は各種の使用例である（Tilemann Friese, *Müntz Spiegel*, Gedruckt zu Franckfurt am Mayn, durch Johann Feyrabendt, in Verlegung Sigmundts Feyrabendts Erben, 1592 ; Wilhelm Ferdinand von Efferen, *Manuale politicum de ratione status*, Francofurti, Typis Anthonii Hummii, 1639 ; Veit Ludwig von Seckendorff, *Teuscher Fürsten-Stat*, Gedruckt zu Hanaw, Bey Johann Aubry, In Verlegung Thomæ Matthiæ Götzens, zu Franckfurth am Mäyn, 1656 ; Johann Georg Gmelin,

図 12

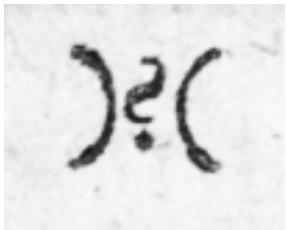


図 13

Reise durch Sibirien, von dem Jahr 1733 bis 1743, Bd. 2, 1751）。

(mm) ドイツ以外の例は列挙可能なほど限られている。スロバキアの 4 件（Trnava（1696 年）、Laibach（1709 年）、Bratislava（1746 年）、Leitschau（1797 年））とチェコの 1 件（Prag（1701 年））、ハンガリーの 2 件（Gyor（1742 年、1746 年））、ラトビアの 2 件（Riga（1773 年、1774 年））についてもドイツの影響が強いと考えられる。スイスでは Basle（1575 年、1758 年、1763 年）および Zurich（1759 年、1760 年）の 5 件が見つかった。Zurich の本はフランス語である。オランダでは Amsterdam（1650 年、1656 年）の 2 件、デンマークでは Copenhagen（1761 年）の 1 件が見つかった。London で 1755 年に印刷された本 1 件で、最初の前付折丁に)(が用いられ、以下の折丁では小文字アルファベットが使われている例が見つかった。また Philadelphia（1785 年）の例が 1 件見つかった。

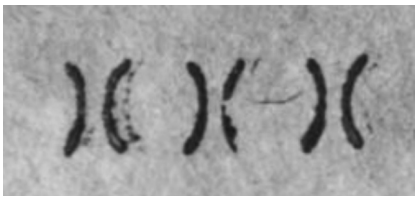


図 14

図 15

(nn) センターの調査では、正順の丸括弧の使用例は全体で 60 件、うちドイツで印刷ないし出版された本は 25 件（42%）であった。逆順の丸括弧の使用に比べるとごく稀にしか使われないが、使用されている場合に限るとドイツで最もよく使われている。他の使用例はイングランドで印刷ないし出版された本 18 件（30%）、オランダで印刷ないし出版された本 11 件（18%）が比較的多く、その他はアイルランドが 2 件、スイス、イタリア、スウェーデンが各 1 件であった。括弧の種類と括っている記号で分類すると、丸括弧でコロンを括るやり方 (:) が 7 件（Herborn 1603 年、Marbourg 1608 年、Goslar 1615 年、Frankfurt 1625 年、Cologne 1628 年、Leiden 1643 年、Basle 1657 年）、丸括弧で疑問符を括るやり方 (?) が 8 件（Tübingen 1612 年、Leiden 1615 年、1640 年、1645 年（2 件）、Cologne 1618 年、1649 年、Helmstedt 1665 年）、丸括弧でアステリスクを括るやり方 (*) が 9 件（Augsburg 1606 年、Amsterdam 1630 年、1646 年、1651 年、Leiden 1644 年、Stockholm 1652 年、Hambourg 1670 年（2 件）、Berlin and Leipzig 1760 年）見つかった。ただし 3 件（Augsburg 1606 年、Amsterdam 1630 年、Leiden 1644 年）では 3 個一組のアステリスクが用いられている。その他、1 つのピリオドを括るやり方（London 1577 年）、2 つのピリオドを括るやり方 (. .)（Amsterdam 1611 年）、節標を括るやり方 (§)（Celle 1713 年）、丸括弧を二重にするやり方 (( ))（Neubrande 1730 年）、コロンを角括弧で括るやり方 [:]（Hamburg 1608 年）が各 1 件見つかっている。図 16 はピリオドを丸括弧で括っている例（Peter Martyr, *The history of trauayle in the VVest and East Indies, and other countreys lying eyther way, towardes the fruitfull and ryche Moluccaes as Moscouia, Persia, Arabia, Syria, Ægypte, Ethiopia, Guinea, China in Cathayo and Giapan*, Imprinted at London, By Richarde Iugge, 1577）、

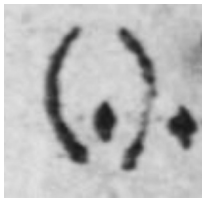


図 16

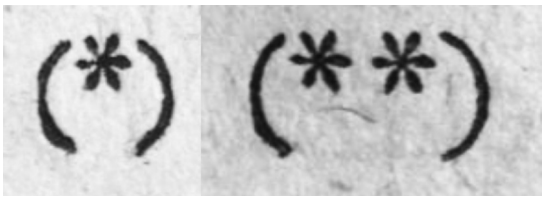


図 17

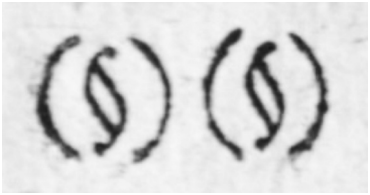


図 18

図 17 はアステリスクを丸括弧で括っている例（Johann Heinrich Gottlob von Justi, *Oeconomische Schriften über die wichtigsten Gegenstände der Stadt- und Landwirthschaft*, Berlin und Leipzig, Im Verlag des Buchladens der Real-Schule, 1760）、図 18（*Chur-fürstliche braunschweig-lüneburgische Ober-Appellations-Gerichts-Ordnung von dem durchlauchtigstem Fürsten und Herrn Herrn Georg Ludwig, Hertzogen zu Braunschweig und Lüneburg*, Celle, In Verlegung Hieronymus Friederich Hoffmann, 1713）は節標を丸括弧で括っている例である。括弧に括るやり方を採用したとき、折丁が複数にわたるときには括弧の内側で記号を繰り返すことも、括弧自体を繰り返すこともできる。図 19（Jean de Chokier, *Thesaurus politicorum aphorismorum repetitæ lectionis*, Coloniæ Agrippinæ, Apud Joannem Antonium Kinchium sub Monocerte, 1649）では疑問符を括る括弧自体が繰り返されているし、図 20（Claude Saumaise, *Dissertatio de foenore trapezitico, in tres libros divisa*, Lugduni Batavorum, Ex officina Ioannis Maire, 1640）では括弧の内側で疑問符が括られている。実例自体が少ないので、どちらのやり方を採用するかについて規則性を見出すことはできなかった。また一見して奇妙な例を掲げておく。図 21（Photius I, *Lectorum a Photio librorum recensio*, Augustae Vindelicorum, Ad insigne pinus [Christophor. Mangus], 1606）では最初の 2 つの折丁ではコロンを逆順の丸括弧で囲むやり方):(が採用されているが（一番左と真ん中）、3 つ目の折丁では数学の証明で使われる「ゆえに」記号のような記号を通常の順序の丸括弧で括っている（右）。これは異なるやり方を採用しているのであろうか。それとも 3 つ目の折丁であることを図示しているのであろうか。(∴) が単独で用いられている例も見つかっただけに、結論が出しにくい。

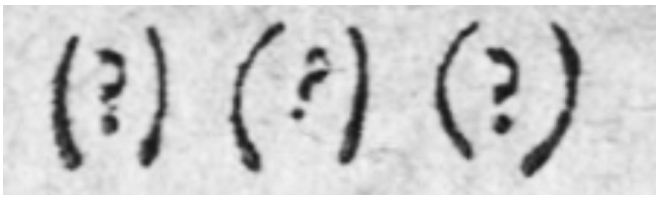


図 19

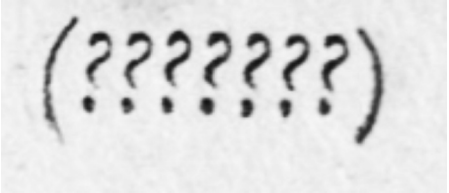


図 20

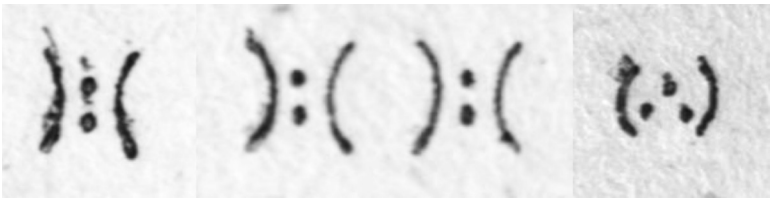


図 21

(oo) 小文字アルファベットを丸括弧で囲むやり方のうちには、折記号の数字を括弧の外に出すやり方と数字を含めて括弧で囲むやり方の 2 種類があるようである。数字を外に出すやり方は 10 件（Genoa 1622 年、London 1657 年、Frankfurt and Marburg 1658 年、Frankfurt 1710 年、1760 年、Königsberg 1761 年、Nurnberg 1756 年、1758 年、Frankfurt and Leipzig 1765 年、1797 年）、数字を含めて囲むやり方が 10 件（London 1646 年、1660 年、1663 年、1685 年、1741 年、1748 年（2 件）、1752 年、Dublin 1720 年、1770 年）見つかった。このうち Frankfurt（1760 年）では一箇所

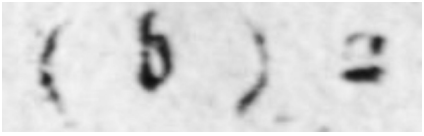


図 22

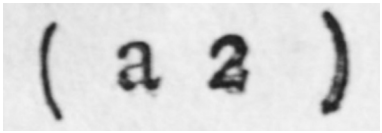


図 23

だけ数字を含めて丸括弧で囲んでいるが、植字工の誤りとみなしてよさそうである。図 22 は Immanuel Kant, *Frühere noch nicht gesammelte kleine Schriften*, T. 2, Frankfurt und Leipzig, [s.n.], 1797 に、 図 23 は Girolamo Belloni, *A dissertation on commerce*, London, Printed for R. Manby, 1752 にそれぞれ記されているものである。大文字アルファベットを丸括弧で囲むやり方は 3 件見つかったが、そのうち数字が括弧の外にあるのが 2 件（London 1632 年、Nurnberg 1762 年）、括弧内にあるのが 1 件（Leiden 1698 年）であった。一方、角括弧で小文字アルファベットと数字を囲むやり方が 3 件（Edinburgh 1708 年、London 1719 年、1759 年）見つかり、大文字アルファベットと数字を囲むやり方が London で 1742 年に出版された 5 巻本に見いだされた。

(pp) 結論としては、前付部分の折記号として丸括弧で囲まれた記号を用いるやり方は限られた地域でごく稀に用いられたようである。Sayce の観察をほぼ追認することになるが、あらためて書けば、コロン、疑問符、アステリスクなどで囲むやり方はドイツ、Leiden、Amsterdam、Basle で見つかり、そのほとんどは 17 世紀の刊本である。ところで、センターの調査では、小文字アルファベットを丸括弧で囲むが、折記号の数字を外に出すやり方は主にドイツの影響下にある地域で 17・18 世紀に用いられることがあり、London でも 17 世紀に使用例がある。これに対して、小文字アルファベットと折記号の数字の両方を丸括弧で囲むやり方は（Frankfurt の例を誤りと考えれば）London と Dublin で見つかる。また小文字ないし大文字のアルファベットを角括弧で囲むやり方は London や Edinburgh で見つかる。

(qq) センターの調査でも 16 世紀にフランスで印刷あるいは出版された前付部分に折記号のある本 31 件のうち小文字アルファベットが使用された例は 4 件しか見つからなかった。17 世紀でも 100 件中 5 件である。これに対して 18 世紀では 431 件中 326 件（76%）を占め、しかも 18 世紀の最初の使用例は 1714 年まで遡れるにすぎない。

(rr) センターの調査でもイタリアで印刷ないし出版された前付部分の折記号のある本 182 件中小文字アルファベットが用いられているのは 80 件（44%）で、最もよく用いられたやり方である。どの世紀でもほぼ均等に使われている。Venice で印刷ないし出版された本に限定すると 86 件中 47 件（55%）で、1554 年から 1786 年まで使用例が見つかった。Rome では 18 件中 5 件（28%）にとどまったが、調査数が少なすぎるので Sayce の見解が否定されたとまではいえない。

(ss) センターの調査ではオランダで印刷ないし出版された本で小文字アルファベットが用いられているのは 69 件（20%）であり、アステリスク（207 件）に次いで 2 番目に使用例が多いが、はるかに少ない。世紀ごとでは 16 世紀 7 件中 3 件、17 世紀 143 件中 4 件（3%）、18 世紀 191 件中 62 件（32%）であった。16・17 世紀の例は Leiden 5 件、Amsterdam、The Hague 各 1 件であり、いずれも単独で使われていた。18 世紀の例を都市別に分けると、Amsterdam 116 件中 43 件（37%）、The Hague 40 件中 15 件（36%）に対して、Leiden では 21 件中わずか 2 件であった。調査数が少ないとはいえ、Leiden では 18 世紀にはほぼ廃れていたように見える。

(tt) センターの調査ではドイツで印刷ないし出版された本で小文字アルファベットが用いられているのは 317 件（29%）であり、逆順の丸括弧（402 件）に次いで 2 番目に使用例が多い。世紀ごとでは 16 世紀 27 件中 3 件（11%）、17 世紀 221 件中 48 件（22%）、18 世紀 852 件中 266 件（31%）であった。18 世紀の例を都市別に分けると、印刷地または出版地が Leipzig であると記されている（出版地が複数記されているときはそのうちいずれかが Leipzig である）本 206 件中 79 件（38%）に小文字アルファベットが用いられていたのに対して、同じ条件の

Frankfurt の本 128 件中 45 件（35%）、Halle の本 91 件中 31 件（34%）、Berlin の本 78 件中 34 件（44%）、Gottingen 62 件中 13 件（21%）、Hamburg 43 件中 11 件（26%）、Jena 40 件中 11 件（28%）、Wien 41 件中 18 件（44%）でも用いられており、殊更相違は見られなかった。

(uu) センターの調査ではスイスで印刷ないし出版された本で小文字アルファベットが用いられているのは 102 件中 52 件（51%）であった。世紀ごとの内訳は、16 世紀 18 件中 5 件、17 世紀 10 件中 1 件、18 世紀 74 件中 46 件であり、16・17 世紀の使用例は Basle の本、18 世紀の使用例は 1740 年から 1799 年までで Basle の本だけではなく Geneve や Berne の本も含む。調査対象が少なく、その中に Basle の本が多いので結果には偏りがある。

(ww) ベルギーについて同様に調べた結果は 32 件中 4 件で、1664 年から 1786 年までの本であった。

(xx) 他の国の例は、Philadelphia（1722 年－1794 年）13 件、Madrid（1782 年－1790 年）3 件、Valladolid（1592 年）、Barcelona（1734 年）、Zaragoza（1781 年）、Copenhagen（1757 年－1787 年）6 件、Riga（1771 年－1794 年）7 件が見つかった。

(yy) 小文字アルファベットはイングランドで印刷ないし出版された本の前付部分の折記号 590 件中 333 件（56%）、スコットランドで印刷ないし出版された本 35 件中 31 件（89%）、アイルランドで印刷ないし出版された本 29 件中 19 件（66%）で採用されている。イングランドの使用例を世紀ごとに分けると、16 世紀 9 件中 1 件、17 世紀 105 件中 25 件（24%）、18 世紀 476 件中 307 件（64%）であった。もともと London の本が圧倒的に多いこともあるが、16・17 世紀の使用例は London の本のみであり、Oxford の最初の使用例は 1737 年まで遡れるにすぎない。スコットランド、アイルランドの調査対象はすべて 18 世紀の出版物である。

(zz) センターの調査では 1562 年に Basle で印刷された本の前付部分の折記号に aa から dd まで使われた例が見つかった。この他、索引のみで aaa, bbb という折記号を使っていた例が Paris（1578 年）に見つかった。

(aaa) センターの調査ではフランスで印刷ないし出版された本の前付部分の折記号に大文字アルファベットが採用されていた例は 539 件中 23 件（4%）にすぎなかった。16 世紀 1 件（Dijon 1600 年）、17 世紀 3 件（Rouen 1618 年、Paris 1641 年、1671 年）、18 世紀 19 件（すべて Paris で 1751 年 -1793 年）であった。Dijon（1600 年）の例では本文折記号に小文字アルファベットが使われていたが、他はいずれも大文字アルファベットであった。

(bbb) イタリアの例も少なく、182 件中 8 件（4%）にすぎない。Florence（1521 年）、Venice（1528 年、1633 年、1662 年、1671 年、1763 年）、Vicenza（1626 年）、Rome（1779 年）。従って 16 世紀に限られるわけではない。いずれにせよ本文折記号でも大文字アルファベットが使われている。

(ccc) センターで調査したスペインで印刷ないし出版された本は 51 件（28 件）にすぎないが（16 世紀 1 件、17 世紀 5 件、18 世紀 22 件）、そのうち前付部分の折記号に大文字アルファベットが使われていた例はわずか 1 件（Barcelona 1784 年）にすぎなかった。ただし 18 世紀にも見つからないわけではないことになる。

(ddd) センターの調査ではオランダで印刷ないし出版された本のうち前付部分の折記号に大文字アルファベットが採用されていた例は 336 件中 32 件（10%）であった。ただし 16 世紀 1 件、17 世紀 28 件（20%）、18 世紀 3 件（2%）であり、時代による違いが顕著である。

(eee) センターの調査ではスイスの本 102 件中 12 件（12%）で大文字アルファベットを使用されていた。16 世紀 18 件中 3 件、17 世紀 10 件中 2 件、18 世紀 74 件中 7 件である。

(fff) センターの調査ではドイツの本 1100 件中 74 件（7%）で大文字アルファベットが使用されていた。16 世紀 27 件中 6 件（22%）、17 世紀 221 件中 38 件（17%）、18 世紀 852 件中 30 件（4%）であり、時代を降るにつれて減っていることがわかる。しかし世紀末までに廃れたわけではなく、一番遅い例は 1798 年の刊本であった。

(ggg) センターで行った調査のやり方に問題がなければ、前付部分の折記号として大文字アルファベットを使うやり方は時代を降るにつれて廃れるが、16 世紀までに限られているわけではない。

(hhh) 詳しくは後述（次号以下）するが、本文折記号を大文字の B から始めていることが確認できた本のうち前付部分に折記号を含む本をセンターで 382 件調査したなかで、折記号として用いられていたのは小文字アルファベット 218 件（57%）、大文字アルファベット 152 件（40%）、アステリスク 2 件、段落標 2 件、節標 1 件、逆順の丸括弧 1 件、括弧に囲まれたアルファベット 6 件であった。逆順の丸括弧は Leipzig（1668 年）の事例で、非常に珍しいケースといえる。他の英語圏以外の例は Rouen（1618 年）で大文字アルファベットを用いた例が 1 件あり、また Basle の J. J. Tourneisen が 1790 年代に印刷した本で 10 件（小文字アルファベット 9 件、大文字アルファベット 1 件）見つかった。しかしほとんどは London など英語圏の例である。イングランドに限られているわけではなく、Edinburgh と Dublin の例も少数だが見つかっている。大文字アルファベットの使用例 152 件のうち、前付部分がひとつの折丁しかないもの（すなわち折記号が A だけで済んでいるもの）が 90 件あるが（そのうち 1 件では A4 の代わりに a4 と記されていたが、単純な誤りと考えられる）、他の 62 件の前付部分はもっと長い。そのうち 6 件（London 1614 年、1654 年、1691 年、1732 年、1796 年、1797 年）では A の後も B、C というように大文字アルファベットを使い続け、本文折記号をあらためて B からはじめていた。残りの 57 件（1634 年 -1796 年）は別のやり方に変えていたが、その内訳は、小文字アルファベット a に変えるパターン A a … が 35 件（London 1634 年 -1796 年、Birmingham 1791 年）、小文字アルファベット b に変えるパターン A b … が 8 件（London 1703 年 -1775 年、Birmingham 1791 年）、丸括弧で括られた小文字アルファベット (a) に変えるパターン 7 件（London 1657 年 -1748 年）、角括弧で括られた小文字アルファベット [a] に変えるパターン A [a] … が 4 件（London 1684 年 -1759 年）、[b] に変えるパターン A [b] … が 1 件（London 1719 年）、まずアステリスクつきの大文字アルファベット *A を用いた後で小文字アルファベット a b … に変えるパターンが 1 件（London 1787 年）であった。従って時代的な相違はほとんど見られないし、印刷者ないし出版者に着目してもかならずどれかひとつの方法を採用しているようではなかった。いずれにせよイングランドでは大文字アルファベット A が前付部分の折記号とみなされたために本文折記号には B 以降が用いられる傾向があることが確認できる。ただしその場合には、本文折記号をわざわざ B からはじめているのに前付部分の折記号を別のやり方 ― アステリスクその他の記号や括弧に囲まれたアルファベットなど ― で記している事例が少数ながら見つかったことがあらためて疑問になる。

(iii) 複数の折丁があるときは通常図 24（Charles de La Chesnée-Monstereul, *Le floriste François*, A Caen, Chez Eleazar Mangeant, 1654）のように ã ẽ ĩ õ ũ の順序となる。6 番目の折丁以降では図 25（Jacques Savary, *Le parfait negociant*, Quatrième edition, A Lyon, Chez Jacques Lyons, 1697）のように記号を 2 つ重ねるやり方もあるが、センターの調査ではチルダつき母音字の使用例で前付部分が長い例が少なかったので、何が一般的なやり方かは決めかねる。

(kkk) センターで行った調査で前付部分の折記号にチルダのついた母音字が用いられていた例

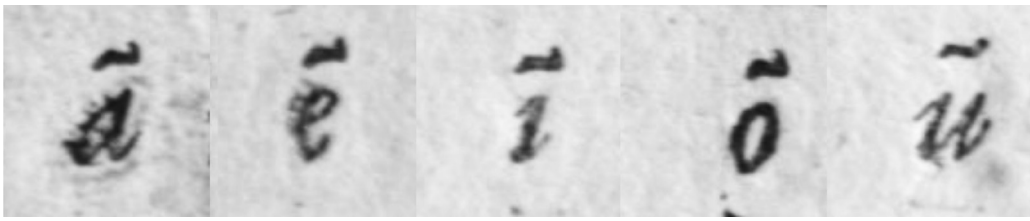


図 24

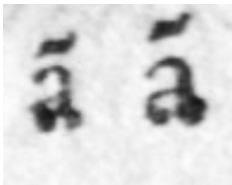


図 25

は 155 件見つかったが、その内訳はフランス 140 件、オランダ 10 件、ドイツ 3 件、ベルギー 2 件であった。フランスの例のうちもっとも早いのは 1574 年に Douai で出版された本である。Paris の例は 1575 年から 1765 年におよぶが、世紀別にわけると 16 世紀 31 件中 13 件（42%）、17 世紀 100 件中 72 件（72%）、18 世紀 431 件中 55 件（13%）であり、しかも 1750 年代以降は頻度が明らかに下がっており、Sayce の指摘があてはまっている。フランスの例を都市別に分けると、Paris 102 件（1575 年 − 1764 年）、Lyon 14 件（1580 年 − 1733 年）、Rouen 11 件（1676 年 − 1737 年）の他、Caen（1654 年）、Douai（1574 年）、Epinal（1633 年）、Metz（1698 年）、Nîmes（1758 年）、Pont-à-Mousson（1608 年）、Toulouze（1680 年）、Tournay（1654 年）各 1 件であった。Lyon で印刷ないし出版された本で前付部分に折記号が記されていた本は全部で 35 件あったが、世紀別にチルダつき母音字の出現頻度を見ると、16 世紀 6 件中 2 件、17 世紀 19 件中 11 件、18 世紀 10 件中 1 件であり、しかも 17 世紀の使用例は世紀後半（1656 年 -1693 年）のみであった（世紀前半には短剣符や節標が使われている）。同様にフランス地方都市で印刷ないし出版された本について見ると、16 世紀 4 件中 2 件、17 世紀 10 件中 6 件、18 世紀 42 件中 8 件であったが、17 世紀の例は世紀の全体に広がっていた。調査件数が少ないとはいえ、Sayce の指摘がここでもあてはまっていることになる。

(lll) センターの調査で見つかったベルギーの 2 例は Louvain（1646 年）と Bruxelles（1655 年）、ドイツの 3 例は Frankfurt（1603 年）、Cologne（1695 年）、Berlin（1751 年）であった。

(mmm) センターの調査で出版事項にオランダの都市名が記されていた 10 例の内訳は Amsterdam（1704 年、1756 年（2 件）、1757 年）、The Hague（1709 年、1727 年、1738 年、1740 年、1743 年（2 件））であった。このうち Amsterdam で 1704 年に出版されたと標榜する [Du Bos], *Les interets de l'Angleterre mal-entendus dans la guerre presente*, 6e ed., Amsterdam, Chez J. Louis de Lorme と同地で 1756 年に出版されたとされている 2 冊 [Ange Goudar], *Les intérêts de la France mal entendus, dans les branches de l'agriculture, de la population, des finances, du commerce, de la marine, & de l'industrie par un citoyen*, Amsterdam, Chez Jacques Coeur, v. 1-2 についてはそれぞれ Rouen と Paris が実際の印刷地であるという指摘がすでになされている（Emil Weller, *Die falschen und fingierten Druckorte*, 2. Bd., enthaltend die französischen Schriften, 1970）。従って、特に Amsterdam と記されているフランス語書の場合には、Sayce のいうように出版地の偽装を一度疑ってみてもよいかもしれない。

図 26

図 27

(nnn) センターの調査で前付部分の折記号にギリシア文字が用いられて

いた例は7件見つかったが、その内訳はスイス7件（Basle 1530年、1562年、1570年、1574年、1578年、Geneve 1604年）、オランダ1件（Leiden 1614年）であった。

(ooo) センターの調査で見つけた他の記号を示す。図26はどちらも図16と同じくPeter Martyr, *The history of trauayle in the VVest and East Indies, and other countreys lying eyther way, towardes the fruitfull and ryche Moluccaes as Moscouia, Persia, Arabia, Syria, Ægypte, Ethiopia, Guinea, China in Cathayo and Giapan*, Imprinted at London, By Richarde Iugge, 1577で用いられているもの。図26の右側とほぼ同じ記号が別の本でも使われている（図27、François Hotman, *Francogallia*, [Geneva] : Ex officina Iacobi Stœrij, 1573）。図28は同じ記号がSayceの論文にも記載されているが、Franco Burgersdijck, *Idea oeconomicæ et politicæ doctrinæ*, Lugd. Batavorum [Leiden], Apud Hieronymum de Vogel, 1644に記されているもの。図29はAlexander Gottlieb Baumgarten, *Aesthetica*, Traiecti cis Viadrum [Frankfurt], Impens. Ioannis Christiani Kleyb, 1750、図30はWolfgang Helmhard, Freiherr von Hohberg, *Georgica curiosa aucta*, 1. T., Nürnberg, In Verlegung Martin Endters, 1715でそれぞれ使われているものである。

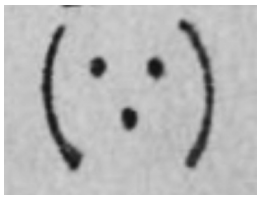


図28

図29

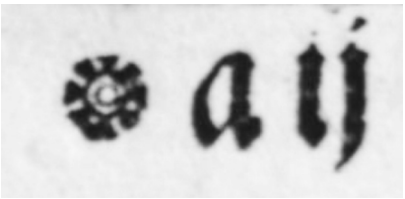


図30

(ppp) Sayceが挙げている以外の特徴的流儀として、前付部分の折記号ではなんらの記号を用いず、折丁内の順番を明らかにするために番号だけをつけるというやり方がある。複数の折丁になると混乱が生じかねないので、ほとんどの場合では前付部分がひとつの折丁に収まる量になっている。このやり方はドイツの本で18世紀後半に出版された本でだけ見つかった（Leipzig 1742年、1754年、1775年、1780年、1787年、1788年、1797年、Frankfurt 1750年、1761年、Berlin 1760年、Halle 1772年、Wittenberg and Zerbst 1790年、Königsberg 1798年、Hamburg and Brunswick 1800年）。

（一橋大学社会科学古典資料センター専門助手）